

カラー図解

DTP&印刷 スーパー しくみ事典 2016

Adobe Creative Cloud &
業界トピック110を巻頭特集!

- Adobe CC 導入で変わるワークフロー
Adobe Comp / Adobe Stock
Typekit / Creative Cloud Libraries
- 現場に向けて選んだ厳選機種ガイド64
枚葉インクジェット&液体トナー機 /
デジタル印刷機 / 大判インクジェット
- 最新トピック&基礎知識
フォント / モバイルアプリ / 電子出版 /
用紙 / 加工 / カラーマネージメント /
ブルーフ / プリプレス / エコロジー

本書の使い方	011
VISUAL CONTENTS	012

巻頭特集 最新トピックス110014

01 印刷のしくみ073

- | | | | |
|----------------------|-----|------------------------|-----|
| ■ 身近な印刷物の種類 | 074 | ■ DTPの進化と制作環境 | 080 |
| ■ 印刷物ができるしくみ | 076 | ■ DTPによる印刷物制作の流れ | 082 |
| ■ DTP制作のプランニング | 078 | ■ 情報収集のポイント | 086 |

02 ハードウェア087

- | | | | |
|---------------------------------|-----|-------------------------|-----|
| ■ PCの基本的な構成要素 | 088 | ■ クラウドコンピューティング | 102 |
| ■ OS (オペレーティングシステム) の基礎知識 | 090 | ■ スキャナのしくみ | 104 |
| ■ キーボードのしくみ | 092 | ■ インクジェットプリンタのしくみ | 106 |
| ■ 液晶ディスプレイのしくみ | 094 | ■ レーザープリンタのしくみ | 108 |
| ■ ストレージの現在 | 098 | ■ インターフェイスの種類 | 110 |
| ■ ポインティングデバイス | 100 | | |

03 デジタル素材の作成111

- | | | | |
|-----------------------|-----|-------------------------------|-----|
| ■ デジタルカメラ | 112 | ■ Illustratorの用途 | 120 |
| ■ ビットマップ画像の基礎知識 | 114 | ■ Illustratorのバージョンと互換性 | 122 |
| ■ Photoshopのしくみ | 116 | ■ 色のトラブルを回避する運用 | 124 |
| ■ ベクターイメージの基礎知識 | 118 | | |

04 文字とフォント125

- | | | | |
|---------------------------|-----|------------------------------|-----|
| ■ 和文書体と欧文書体 | 126 | ■ OpenTypeフォントで表現できる文字 | 138 |
| ■ フォントと文字コードの知識 | 130 | ■ 外字の種類とその使い方 | 140 |
| ■ さまざまな文字コード | 134 | ■ 文字の大きさを表す単位 | 142 |
| ■ OpenTypeフォントの基礎知識 | 136 | | |

05 レイアウトデザイン 143

- DTP制作物の構成要素と名称 144
- 版面設計の基礎知識 150
- InDesignのしくみ 152
- 日本語組版の基礎知識 154
- 日本語組版の基礎知識: 組み方の種類 156
- 日本語組版の基礎知識: 組み方のしくみ 158
- 自動組版の基礎知識 160
- 校正作業 164
- 忘れてはならないデータチェック 168

06 電子出版と著作権 171

- 電子書籍の市場と配信のかたち 172
- 電子書籍のフォーマット 176
- 電子書籍デバイスの種類 178
- 電子ペーパーのしくみ 180
- 著作権の基礎知識 182

07 色とカラーマネージメント 185

- 色を数値で表すしくみ 186
- 色を空間で表すしくみ 188
- プロファイルのしくみ 190
- カラーマネージメントのしくみ 192
- 測色器のしくみ 194
- RGB→CMYK変換のしくみ 196
- カラー計画とアプリケーションの関係 198
- 制作上の色指定のポイント 200
- アプリケーションのカラー設定 202

08 プルーフ 203

- プルーフの基礎知識 204
- Japan Colorの基礎知識 206
- 雑誌広告基準 (JMPA) カラーの基礎知識 208
- プルーフに必要なプロファイル 210
- 出力機から見たプルーフ用途の特徴 212
- PostScriptコントローラのしくみ 214
- 大判プルーフのしくみ 216
- DDCPのしくみ 218
- 特殊印刷のためのプルーフ 220

09 デジタルプリプレスワークフロー 221

- データが出力されるまで 222
- デジタルデータ出力の基礎知識 224
- ワークフローRIPの役割 226
- PDFとAdobe PDF Print Engine 228
- CTPとスクリーニング技術 230
- 1bit TIFFのしくみ 232
- AM/FMスクリーニングの基礎知識 234
- 面付けの基礎知識 236
- プレートセッターのしくみ 238
- CIP3/CIP4のしくみ 240
- MISのしくみ 242

10 デジタル印刷 243

- デジタル印刷のワークフロー 244
- デジタル印刷機でのカラーマネジメント 246
- JDFの役割 248
- デジタル印刷機のしくみ 250
- バリアブル印刷のしくみ 254
- Web to Printのしくみ 256
- サイン&ディスプレイ分野の大判プリンタ 258

11 用紙と印刷 259

- 印刷用紙の基礎知識 260
- 印刷用紙ができるまで 262
- 印刷用紙の選び方 264
- インキの基礎知識 266
- 多色印刷と広色域印刷のしくみ 268
- 代表的な4種類の印刷方法と版式 270
- オフセット枚葉印刷機のしくみ 272
- オフセット輪転印刷機のしくみ 274
- オフセット印刷機の現在 276
- オフセット印刷の小ロット対応と環境配慮 278
- 目的で変わる印刷機の種類 280
- オフセット印刷のトラブルと原因 282

12 製本・後加工 285

- さまざまな製本様式 286
- 製本工程 288
- 代表的な加工技術 292
- アイデアが活きる紙の加工 294
- 印刷の価値を高める後加工 296
- さまざまな特殊印刷や特殊インキ 298

13 印刷とエコロジー 301

- 印刷業界が目指すエコロジー 302
- カーボンフットプリントと印刷 304
- 紙にまつわるエコロジー 306
- インキにまつわるエコロジー 308
- 製版にまつわるエコロジー 310
- 印刷にまつわるエコロジー 312
- サイン&ディスプレイにまつわるエコロジー 314
- エコロジーに関する認定と法規 316

巻末特集 厳選機種ガイド64 317

本書の使い方

本書は特集に加え13章による構成で、DTPと印刷業界全般に関する知っておくべき情報を解説しています。パソコンやソフトウェアなどから、デザインの手順、出力や製版などのテクノロジーまで、多くの事柄を網羅しています。

必要な箇所を確認し、そのテーマ内容を理解できるように、構成は1テーマ1見開きが基本となっています。初心者からプロとして活躍されている皆様まで、広く活用いただけます。



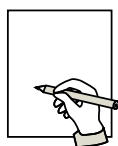
① 各分野、第一線で活躍するプロフェッショナルによる執筆

② 3DCGによるイラストや、写真などで理解度が深まる

③ “1見開き1テーマ”を基本にした構成

④ 関連用語により、補足的な知識が身につく

VISUAL CONTENTS

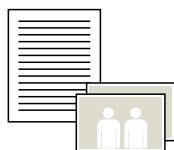


プランニング

1 印刷のしぐみ

p.073

身近な印刷物の種類 074 / 印刷物ができるしぐみ 076 / DTP制作のプランニング 078 / DTPの進化と制作環境 080 / DTPによる印刷物制作の流れ 082 / 情報収集のポイント 086



原稿

3

デジタル素材の作成

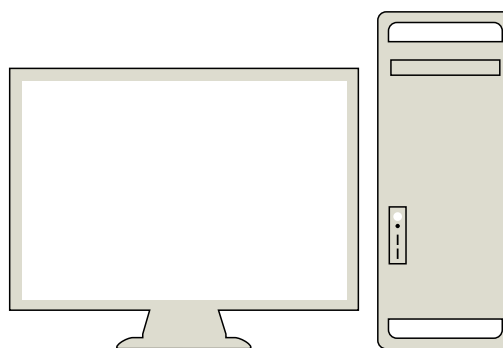
p.111

デジタルカメラ 112 / ビットマップ画像の基礎知識 114 / Photoshopのしぐみ 116 / ベクターイメージの基礎知識 118 / Illustratorの用途 120 / Illustratorのバージョンと互換性 122 / 色のトラブルを回避する運用 124

2 ハードウェア

p.087

PCの基本的な構成要素 088 / OS(オペレーティングシステム)の基礎知識 090 / キーボードのしぐみ 092 / 液晶ディスプレイのしぐみ 094 / ストレージの現在 098 / ポインティングデバイス 100 / クラウドコンピューティング 102 / スキャナのしぐみ 104 / インクジェットプリンタのしぐみ 106 / レーザープリンタのしぐみ 108 / インターフェイスの種類 110



DTP

4 文字とフォント

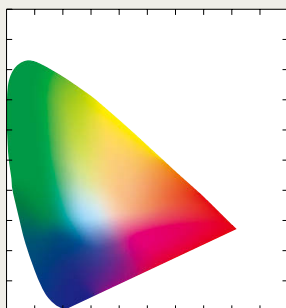
p.125

和文書体と欧文書体 126 / フォントと文字コードの知識 130 / さまざまな文字コード 134 / OpenTypeフォントの基礎知識 136 / OpenTypeフォントで表現できる文字 138 / 外字の種類とその使い方 140 / 文字の大きさを表す単位 142

7 色とカラーマネジメント

p.185

色を数値で表すしぐみ 186 / 色を空間で表すしぐみ 188 / プロファイルのしぐみ 190 / カラーマネジメントのしぐみ 192 / 測色器のしぐみ 194 / RGB→CMYK変換のしぐみ 196 / カラー計画とアプリケーションの関係 198 / 制作上の色指定のポイント 200 / アプリケーションのカラー設定 202



5 レイアウトデザイン

p.143

DTP制作物の構成要素と名称 144 / 版面設計の基礎知識 150 / InDesignのしぐみ 152 / 日本語組版の基礎知識 154 / 日本語組版の基礎知識：組み方の種類 156 / 日本語組版の基礎知識：組み方のしぐみ 158 / 自動組版の基礎知識 160 / 校正作業 164 / 忘れてはならないデータチェック 168

6 電子出版と著作権

p.171

電子書籍の市場と配信のかたち 172 / 電子書籍のフォーマット 176 / 電子書籍デバイスの種類 178 / 電子ペーパーのしぐみ 180 / 著作権の基礎知識 182

DTPと印刷のしくみを知る

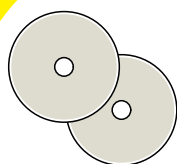
DTPが誕生して約30年。ハードもソフトも大きく進化し、ネットワークを活用した制作環境や入稿が常識になった。一方で、分業という壁がどんどん取り払われ、ワークフローに関わる全員が共通の知識をもって進めなければ印刷物の品質は保てなくなっている。安定した品質を維持するためには、制作サイドも、印刷サイドも、お互いの世界をより深く理解し、コミュニケーションを図ることが必須となっている。

8 プルーフ 📖 p.203

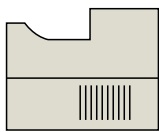
プルーフの基礎知識 204 / Japan Colorの基礎知識 206 / 雑誌広告基準カラー(JMPA)の基礎知識 208 / プルーフに必要なプロファイル 210 / 出力機から見たプルーフ用途の特徴 212 / PostScriptコントロールのしくみ 214 / 大判プルーフのしくみ 216 / DDCPのしくみ 218 / 特殊印刷のためのプルーフ 220

9 デジタルプリプレス ワークフロー 📖 p.221

データが出力されるまで 222 / デジタルデータ出力の基礎知識 224 / ワークフロー RIPの役割 226 / PDFとAdobe PDF Print Engine 228 / CTPとスクリーニング技術 230 / 1bit TIFFのしくみ 232 / AM/FMスクリーニングの基礎知識 234 / 面付けの基礎知識 236 / プレートセッターのしくみ 238 / CIP3/CIP4のしくみ 240 / MISのしくみ 242



入稿 & 出力

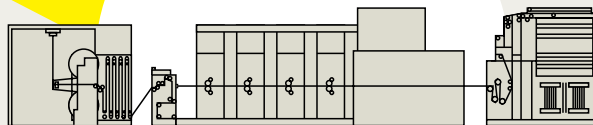


10 デジタル印刷 📖 p.243

デジタル印刷のワークフロー 244 / デジタル印刷機でのカラーマネジメント 246 / JDFの役割 248 / デジタル印刷機のしくみ 250 / バリエابل印刷のしくみ 254 / Web to Printのしくみ 256 / サイン&ディスプレイ分野の大判プリンタ 258

11 用紙と印刷 📖 p.259

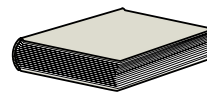
印刷用紙の基礎知識 260 / 印刷用紙ができるまで 262 / 印刷用紙の選び方 264 / インキの基礎知識 266 / 多色印刷と広色域印刷のしくみ 268 / 代表的な4種類の印刷方法と版式 270 / オフセット枚葉印刷機のしくみ 272 / オフセット輪転印刷機のしくみ 274 / オフセット印刷機の現在 276 / オフセット印刷の小ロット対応と環境配慮 278 / 目的で変わる印刷機の種類 280 / オフセット印刷のトラブルと原因 282



印刷

12 製本・後加工 📖 p.285

さまざまな製本様式 286 / 製本工程 288 / 代表的な加工技術 292 / アイデアが活きる紙の加工 294 / 印刷の価値を高める後加工 296 / さまざまな特殊印刷や特殊インキ 298



製本・後加工

巻頭特集

2015-2016年のDTP&印刷を読み解く 最新トピックス 110

巻頭特集では、2015年の重要トピックを、各分野の第一線で活躍する専門家の方々にまとめていただいた。ここでは、紙媒体と電子媒体にまたがる幅広い分野を網羅し、重要キーワードを通して最新トレンドを俯瞰できる内容になっている。読み方は自由で、必要な分野やトピックだけを拾い読みすることもできる。日々忙しい業務に追われる方にとっても重宝するページになっている。お時間のある時に広げていただければ幸いである。

2015年を振り返ると、「クラウド」や「モバイル」という言葉が重要キーワードとして目立った一年であった。ネットワークを活用した新しいワークフローが盛んに提唱され、普及し始めている。一例をあげると、Adobe CCが提唱するワークフローでは、出先のミーティング時であっても、デザイナーはタブレットを使って簡単なラフスケッチをその場で起こし、クライアントの承認を得ることができる。そのスケッチは、クラウドを経由してオフィスのPCで開いて再編集できる。顧客とのコミュニケーションが迅速、スムーズに行える、夢のような制作環境が身近になってきた。PCのタブレット化が進む現在、モバイルアプリや周辺ツールの開発に注目していくことが今後重要になってくるだろう。

一方で、伝統的な技法への再評価の風潮も見逃せない。活版印刷を使った印刷表現を求める声も高まっており、こうした声は特に若い人たちの間で顕著だ。電子書籍などのデジタルコンテンツが当たり前前に普及した現在、紙の良さを改めて実感する機会も増えているのだろう。本当に良いものを見極める多角的なものの見方や発想力が今後ますます必要になってくるのではなかろうか。

Adobe Creative Cloudの最新動向 016

- Adobe CCの最新技術&サービス 016
- Photoshop / Lightroomの新機能 020
- Illustrator / InDesignの新機能 024
- モバイル系ソフトウェア 028
- Adobe Creative Cloudで作る本誌表紙の制作プロセス 032

デジタル印刷・印刷機の最新動向 036

- デジタル印刷・製版・オフセット印刷 036
 - 伝統工芸と最新デジタル印刷が融合した「京扇子」 040
 - 成長のための「省資源化」を実現する「SUPERIA」 050
 - 都市型印刷会社ならではの工夫と効率化 054

フォント・電子出版・その他の分野の最新動向 056

- フォント&タイポグラフィの最新動向 056
- 電子出版の最新動向 060
- アート&クリエイティブの最新動向 064
- 用紙・製本・加工の最新動向 068

Adobe CCの最新技術&サービス

OVERVIEW

- ▶ 「Creative Cloud アセット」でクラウドスペースを有効活用
- ▶ アプリケーションを越えてアセットを登録・配置できる「Creative Cloud Libraries」
- ▶ 4500万点以上の写真・イラスト・ベクトル素材・動画を用意した「Adobe Stock」
- ▶ クリエイター向けのポートフォリオサービス「Behance」
- ▶ スマートフォン・タブレット端末で利用可能な「モバイルアプリ」の充実

2012年5月に提供が開始された**Adobe Creative Cloud**も、すでに3年以上が経過した。当初は、「Adobeのすべてのデスクトップアプリケーションが使用できるだけのサービス」と思っていた方も多いと思うが、現在ではさまざまなサービスが利用できる魅力的なツールへと進化した。ロサンゼルスで開催されたAdobe MAX 2015でも、「**Creative Sync**」というキーワードが盛んに語られていたが、**デスクトップアプリとモバイルアプリ、そしてAdobeが展開するさまざまなサービスが連携**された使い勝手の良い、本当の意味で**繋がるサービス**になったと言える。

例えば、街に出て素敵な風景やポスターに出会ったとしよう。スマートフォンにインストールしたAdobe Capture CCを起動して、その風景やポスターからカラーテーマやブラシ、ベクトルシェイプをその場で作成

することができる。作成したアセットは自分の**Creative Cloud Libraries**に自動的に保存されるため、オフィスのPCを起動すれば特にコピーなどしなくても、すぐに仕事で利用できる。

また、自分のイメージに合う写真を**Adobe Stock**で探し、イメージに合うフォントを**Typekit**で探すこともできる。これらのサービスは、Adobeのアプリケーションから呼び出して使用することができるため、面倒な操作をすることなく、すぐに自分のドキュメントで使用することができる。つまり、自分のCreative Cloudを中心に、**さまざまなアプリケーションやサービスを連携・同期**して使用することができるのだ。ここ数年で起きたこれらの進化は、今後の紙やデジタル媒体制作のワークフローを大きく変えるものになるだろう。

topic

001

「Creative Cloud アセット」 個人版20GB、グループ版100GB、充実のクラウドサービス

Adobe Creative Cloudメンバーシップに加入すると、個人版20GB、グループ版100GBのクラウドスペースが割り当てられる。ここは、単なるファイルの倉庫だと思っている方もいるかもしれないが、それは大きな間違い。実際にブラウザで表示させてみると分かるが、「ファイル」「モバイル作品」「ライブラリ」と大きく3つのエリアに分かれているのが確認できる。

「ファイル」は、まさに自由にファイルを管理できるスペースで、他のユーザーと共有して使用することもできる。共有して作業すれば、いちいちファイルを送る手間を省くことができるため、グループワークにも最適だ。また、意外に知られていないのが、ファイルを過去のバージョンに戻すことができる機能も用意されている点。10日前までという制限はあるものの、「前の校正の時の状態に戻して」なんていうリクエストにも簡単に応えることができる。

「モバイル」は、Adobe Comp CCやIllustrator Draw、Photoshop Fix、Photoshop Mix、Photoshop Sketchといったモバイルアプリで作成したアセットが保存されるスペースだ。通常は特に気にする必要はないが、ブラウザ等からもモバイル作品を管理することができる。

「ライブラリ」は、PhotoshopやIllustrator、InDesign等のCC Librariesパネル(Photoshop、Illustratorはライブラリパネル)で使用するアセットが保存されているスペース。各アプリケーションは、このスペースを経由してアセットの同期を行っている。もちろん、他のユーザーと共有することもできるため、グループワークで使用するパーツ類の管理にも最適。元のファイルを更新さえすれば、そのファイルを使用したドキュメントすべてを簡単に修正できる。



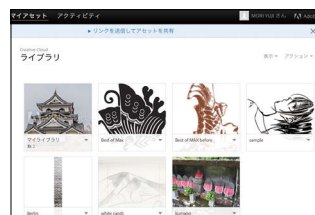
Adobe Creative Cloudデスクトップアプリでは、「[フォルダーを開く]」または「[Webで表示]」のいずれかを選択して、クラウドスペース内のファイルを表示・管理できる



クラウドスペース内の「ファイル」を表示させた状態。フォルダー左上の数字は、共有している人数を表す



クラウドスペース内の「モバイル作品」を表示させた状態



クラウドスペース内の「ライブラリ」を表示させた状態

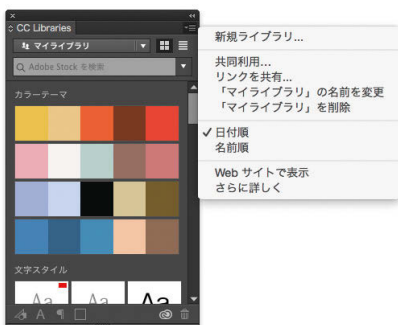
「Creative Cloud Libraries」アプリケーションを越えて利用可能なライブラリ

デスクトップアプリを使ううえで、もっとも連携のメリットを感じられる機能がCreative Cloud Librariesだ。Creative Cloud Librariesは、Photoshop、Illustrator、InDesign等の各アプリケーションから登録したさまざまなアセットを、アプリケーションを越えて利用、および共有することのできる機能。カラーテーマをはじめ、段落スタイル、文字スタイル、ブラシ、グラフィック等の各アセットを登録できる。登録したアセットは、自動的に自分のクラウドスペースに保存されるため、他のアプリケーションのCC Librariesパネル（またはライブラリパネル）からすぐに使用可能となる（ただし、インターネットに接続している必要がある）。常に自分のクラウドのライブラリと同期されているというわけだ。

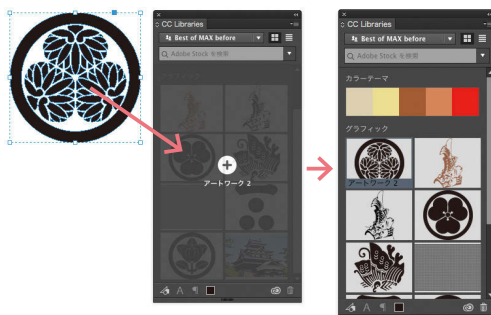
また、Adobe StockやCreative Cloud Marketで入手した画像素材や、Adobe Capture CC等の一部のモバイルアプリで作成したアセットもCreative Cloud Librariesに保存される。まさに、アセット管理の中心的役

割を担うのが、Creative Cloud Librariesなのだ。実際の作業では、仕事の内容に応じたライブラリを作成し、グループワークで使用するパーツ等を登録しておく使い方がお勧め。そして、目的のライブラリを共有しておけば、使用するパーツ等のやり取りも気にすることなくグループでの作業を進められる。仮に使用するパーツに修正が入った場合でも、ファイルをやり取りする必要はない。リンクの更新さえ実行すれば、グループ内での更新の作業も終わることができるのだ。Creative Cloudユーザーの方は、積極的に活用してワークフローの改善に役立ててほしい。

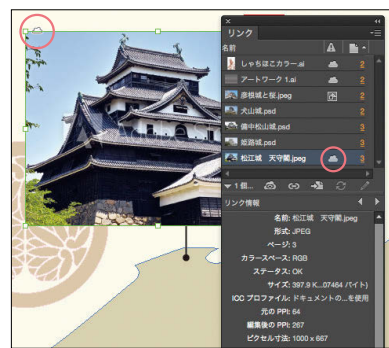
なお、CC Librariesパネル（またはライブラリパネル）から配置したアセットをリンクパネルで見ると、雲のアイコンが表示され、クラウドとリンクしていることが分かるようになっている（InDesignでは、画像自体にも雲のアイコンが表示される）。また、パッケージを実行すれば、通常の画像等と同じように収集できるので、ファイル管理にも役立つ。



Photoshop、Illustrator、InDesign等のCC Librariesパネル（またはライブラリパネル）では、新規でライブラリを作成したり、ライブラリを共有することができる



Creative Cloud Librariesへのアセットの登録は、目的のオブジェクトを選択して、CC Librariesパネル（またはライブラリパネル）上にドラッグして行う。あるいは、パネル下部の目的のボタンをクリックしてもよい



CC Librariesパネル（またはライブラリパネル）から配置したアセットには、クラウドとのリンクを表す雲のアイコンが表示される（図はInDesignのドキュメント）

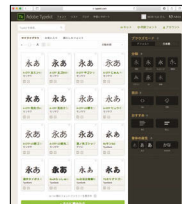
「Typekit」和文フォント34書体、欧文フォント1200書体以上のフォントサービス

Typekitとは、Creative Cloudメンバー向けのフォントサービスで、2015年12月現在、1200書体以上の欧文フォントが使用可能となっている。さらに、モリサワ10書体、タイパバンク10書体を含む、計34書体の和文フォントも使用可能だ。Typekitのフォントはいつでも同期／削除が可能で、デスクトップフォントやWebフォントとして使用できる（すべてのフォントがデスクトップフォントとして使用できるわけではないので注意したい）。なお、デスクトップフォントとして同期したフォントはAdobeのアプリケーションだけでなく、自分のマシンにインストールしたすべてのアプリケーションで使用できるのは嬉しいポイントだ。また、ユーザーがフォントのインストール場所を気にすることなく使えるのも大きなメリットとなっている。

なお、インストールしたフォント数が多く、フォントメニューからフォントを探しづらい場合には、Typekitフォントのみを表示するフィルター機能も用意されている。また、Typekitフォントはパッケージしても収集されないが、データを渡す先がCreative Cloudメンバーであれば、ドキュメントを開いた時にTypekitフォントを同期するようにメッセージが表示されても同期できるので添付する必要はない。データを渡す先がTypekitを利用できない場合には、フォントをアウトライン化したり、PDFファイルに書き出す必要がある。



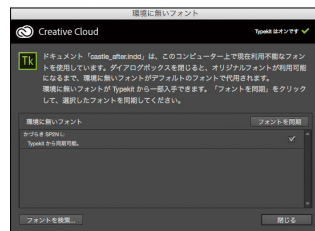
Typekitフォントを追加するには、Creative Cloudデスクトップツールやフォントメニュー、あるいは書式メニューからTypekitのサイトへアクセスする。なお、Creative Cloudデスクトップツールからフォントを管理するページにジャンプすることもできる



Adobe Typekitのサイト。さまざまな条件を基にフォントの絞り込みが可能



フォントメニューには、Typekitフォントのみを表示するフィルター機能が用意されている



インストールしていないTypekitフォントが使用されたドキュメントを開くと、図のようなアラートが表示され、すぐに目的のフォントを同期することができる

topic

004

「Adobe Stock」 4500万点以上のロイヤリティフリー素材から選べるフォトサービス

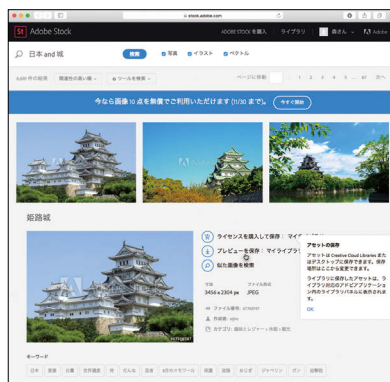
Adobeが新たにスタートさせたのがAdobe Stockというフォトサービスだ。実は、Adobeは似たようなサービスをCS2の時にも行ったことがあるが、この時は外部のフォトストックサービスとの連携だったこともあり、うまくいかず消滅した。しかし今回、AdobeはFotoliaを買収したことで、金銭的にも非常にリーズナブルで、また使い勝手の良いサービスとして新たにスタートさせた（Fotoliaとしてのストックフォトサービスは継続中）。

Adobe Stockには、4500万点以上の写真やイラスト、ベクトル素材、ビデオ素材が用意されている。これらは、すべてロイヤリティフリーだ。金銭的なメリットはもちろんだが、ダウンロードした画像はAdobe Creative Cloudとも連携させることができるため、非常に使い勝手が良い。

一般的な利用方法としては、まず目的に合う画像を見つけたら、自分のライブラリにプレビューを保存する。これをIllustratorやInDesignに配置するわけだが、この時点では課金されておらず、画像にはウォーターマークが入っている。クライアントからOKが出た段階で実際に購入すればよいが、購入と同時に自動的に高品質な画像に差し代わる。いちいち配置しなおす必要がないということだ。もちろん、Photoshopでプレビュー画像を加工していてもOKだ。このように、連携という意味でも非常に使いやすいサービスとなっている。なお、Adobe Stockは、Creative Cloudのメンバーでなくても利用できるが、メンバーには割引サービスがあり、お得に購入できる。



Creative Cloudデスクトップアプリや各アプリケーションのファイルメニュー、CC Librariesパネル（またはライブラリパネル）から、Adobe Stockの画像を検索できる（図はCreative Cloudデスクトップアプリ）。なお、検索には、and, or, not 等のブール演算子を使用することができる



Adobe Stockの画像は、[プレビューを保存]を実行することで、ウォーターマーク入りの画像をダウンロードして試すことができる。画像は、Creative Cloud Libraries、あるいはデスクトップに保存することが可能だが、Creative Cloud Librariesに保存しておく、ウォーターマーク入りの画像を高品質画像に自動的に差し替えることができる



[プレビューを保存]を実行した画像は、すぐに自分のライブラリに反映される。この画像を購入する時は、目的の画像の上でコンテキストメニューから[画像を購入]を実行する

topic

005

「Creative Cloud Market」 画像やベクトル素材、パターン、ブラシ等のコレクション

Creative Cloud Marketは、Creative Cloudユーザーが使用できるサービスで、画像やUI、ベクトル画像、アイコン、パターン、ブラシ等、仕事で役立つコンテンツのコレクションだ。世界中のクリエイターが作成したアセットが用意されており、非常に高品質なのが特徴。画像などは、あらかじめ切り抜き処理されたものも多く、仕事で使用するのに最適。毎月500個まで無料でダウンロードできるので、使わない手はない。

Creative Cloudデスクトップアプリから[アセット] → [Market]を選択すると、Creative Cloud Marketが表示できる。カテゴリーを指定したり、任意の単語で検索したりして目的のアセットを探すことができる。自分のライブラリを指定してダウンロードを実行すれば、すぐにCC Librariesパネルから使用可能だ。どのようなアセットがあるのか、一度、確認してみよう。



Creative Cloudデスクトップアプリから [アセット] → [Market] を選択して、Creative Cloud Marketを表示させる。カテゴリー検索やワード検索が可能だ



気に入ったアセットは、ライブラリを指定してダウンロードできる

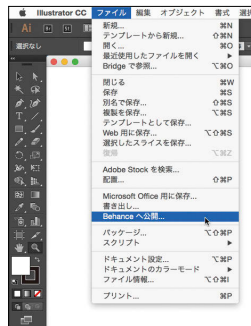


Creative Cloud Marketからダウンロードした画像のサンプル。あらかじめ切り抜かれているのが確認できる

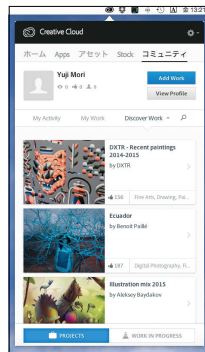
「Behance」 自分の作品を公開できるポートフォリオサービス

Behanceは、Adobeが運営しているクリエイター向けのポートフォリオサービス。世界中のクリエイターが、自身の作品を数百万件以上公開しており、Creative Cloudメンバーでなくても登録できる。FacebookやGoogle+のアカウントを使用して登録することもできるが、Creative CloudメンバーであればAdobe IDでの登録も可能だ。アップロードされた作品には、Facebookのように「いいね」ボタンを押したり、作者をフォローすることができる。まさにクリエイター向けのソーシャルネットワークサービスだ。Creative Cloudメンバーの方は、ぜひ登録して世界中のクリエイターと交流してほしい。なお、日本語も使用可能。

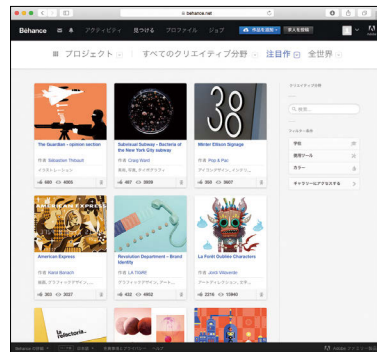
ちなみに、各アプリケーションで作成した作品は、ファイルメニューからそのままBehanceへ公開できる。もちろん、Creative Cloudデスクトップアプリからも作品を公開したり、他のメンバーの作品を閲覧したりできるので活用してほしい。



アプリケーションのファイルメニューからBehanceに、直接作品を公開できる(図はIllustrator CC)



Creative CloudデスクトップアプリからもBehanceにアクセス可能で、自分の作品を公開したり、他のメンバーの作品を閲覧したりできる



Behanceをブラウザで表示させた状態。フィルターを適用して気に入った作品を探すことができる。仕事の情報等もある

「モバイルアプリ」 新しいワークフローを予感させる魅力的なアプリ群

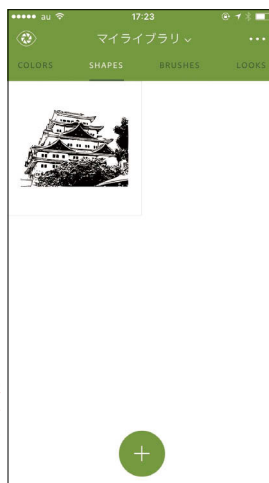
Adobe Creative Cloudを利用する上で大きなポイントとなってくるのが、モバイルアプリだ。Adobeは現在、iPhone&iPadのiOSやAndroid端末用に無料のモバイルアプリをいくつもリリースしている。これらのアプリをうまく活用することで、これまでのワークフローを大きく変えることができる。例えば、手書きのイラストをデジタル素材として使用する場合、これまでならスキャナーでスキャンしていたはずだ。しかし、今ならAdobe Capture CCでキャプチャすれば、イラストをベクターデータとして自分のライブラリに保存することができる。データをやり取りすることなく、すぐに自分のデスクトップアプリで素材を使用できるのだ。

また、クライアントの打ち合わせではAdobe Comp CCが威力を発揮する。

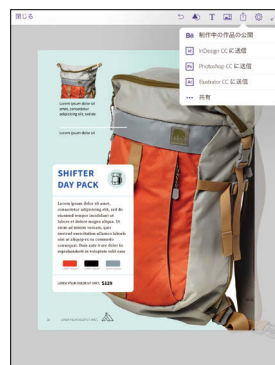
クライアントと打ち合わせしながら、iPad上でざっくりとしたカンパを作成できる。これまで紙の上で行っていた作業がiPad上でできるのだ。作成したカンパは、すぐにPhotoshopやIllustrator、InDesignに送信することができるので、続きの作業や修正、仕上げをデスクトップアプリで行えるのだ。これまでのように、デスクトップ(机の上)だけでなく、外出先や電車内であってもアイデアをすぐに形にすることができ、それをそのまま自分のライブラリに保存できるというわけだ。Adobe自身もモバイルアプリには力を入れており、さらにはデスクトップアプリにもタブレットモードが搭載されてきている。今後、ますますこの流れは加速していくだろう。新しい時代のワークフローは、すぐそこまで来ている。なお、各モバイルアプリに関する詳細は、P.028を参照してほしい。



2015年12月現在、Adobeがリリースしているモバイルアプリ。すべて無料で提供されている



Adobe Capture CCでは、画像からベクターデータやカラーテーマ、ブラシ等を作成できる。もちろん、自動的にCreative Cloud Librariesに保存される



Adobe Comp CCでは、タッチ操作のジェスチャーにより、かなり高度なカンパも作成できる。また、Photoshop CCやIllustrator CC、InDesign CCに送信も可能

Photoshop / Lightroomの新機能

OVER VIEW

- ▶ 「ぼかしギャラリー」フィルターがアップデート、「ノイズ」パネルが搭載
- ▶ Camera Raw がさらに進化。HDR合成とパノラマ生成に対応
- ▶ 「レイヤースタイル」機能が進化、複数の効果の重ねがけが可能に
- ▶ GPU対応機能の拡充で、画像処理が高速化
- ▶ Lightroom CCが顔認識機能を搭載

2015年のPhotoshopアップデートは、その内容が**タッチ操作に適したUI**や、Illustratorのような**マルチアートボード**、作成中の画像をiOSデバイスで即確認できる**デバイスプレビュー機能**、そしてデザインに特化した簡素な画面モードの**デザインスペース**など、よりWebやモバイルデバイスへの親和性を高める方向にPhotoshopが進化しようとしていることをうかがわせる。3Dコンテンツ編集や3Dプリンターへの対応強化も目立つ新機能だ。

しかしそれらの目立つ機能も、Photoshopの原点である画像補正・

レタッチ機能の進化による底上げがあってこそ映えてくる。Photoshop CS6以降の補正機能は加速度的に進化しているが、特にPhotoshop CC 2015では**より「使える」機能を搭載し、また基本機能の操作性やスピードも劇的に良くなった**。この章ではPhotoshop CC 2015搭載機能から、主にレタッチ・補正にどんどん使っていきたい機能を紹介する。また写真管理・編集アプリのデファクトスタンダードとなりつつあるLightroomの、バージョンCC以降の新機能もあわせて見ていこう。

topic

008

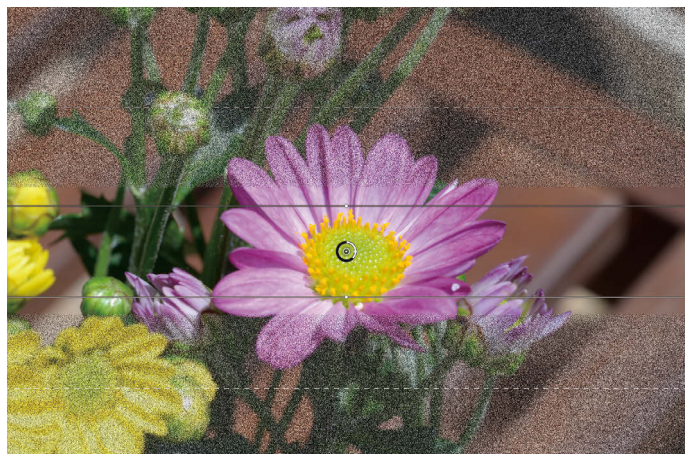
新機能「ノイズ」を搭載した「ぼかしギャラリー」

Photoshop CC 2014で追加された、パスに沿ったぼかし、スピンぼかし、チルトシフトなど多彩な表現を簡単に実現する「ぼかしギャラリー」フィルターがPhotoshop CC 2015版でアップデートし、「ノイズ」パネルが追加搭載された。ぼかすことで消えてしまっていた写真の粒子やノイズのディテールを、自然なノイズを自由に生成してなじませる機能だ。これまでは「ノイズを加える」フィルターや「粒状」フィルターなどを駆使してディテールを加えていたが、CMYKモードでは使用できない、周囲と合わせたノイズを簡単にプレ

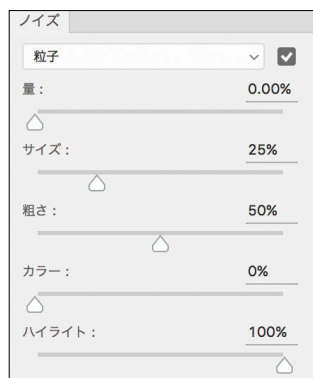
ビューできないなど制限も多く、また生成するノイズ形状に不満な点もあった。

今回搭載された「ノイズ」機能は、元々写真画像のノイズ・粒子を復元する機能であるため非常にリアルな粒子を生成する。CMYKモードでも使える上、プレビューも拡大・縮小してリアルタイムで確認できるため、かなり優秀な「ノイズジェネレータ」になっている。

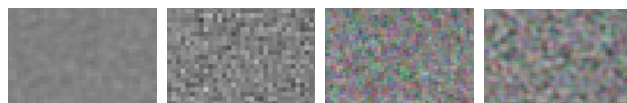
このフィルタを自然なノイズ・粒子が必要なレタッチに応用すれば、今までよりもかなり楽に、さらに質の高い仕上がりが期待できる。



「チルトシフト」ぼかしに、分かりやすくするためノイズを最大量追加した。ぼかしのからまない部分にはノイズは生成されない。ノイズの形状やかかり具合を確認しながら周囲と合わせられるため、作業効率も格段に向上した



ノイズパネルの「粒子」を選択した状態。設定項目が多く、画面上でリアルタイムに確認でき、直感的で作業効率も良い。「ソフトライト」などの描画モードの中性色で塗りつぶしたレイヤーをスマートオブジェクトにし、「フィールドぼかし」でノイズを生成してやれば直下のレイヤーへ簡単に粒子効果を適用できる。的確な調整項目が揃っており、生成するテクスチャは非常にバリエーションに富んでいる。合成や塗りをを使った修正作業の品質と作業速度がさらに向上するだろう



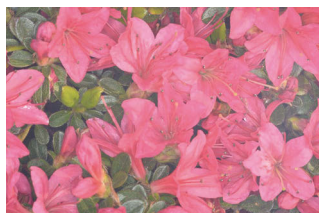
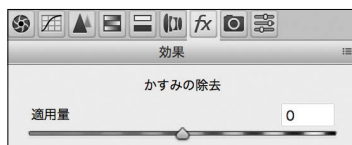
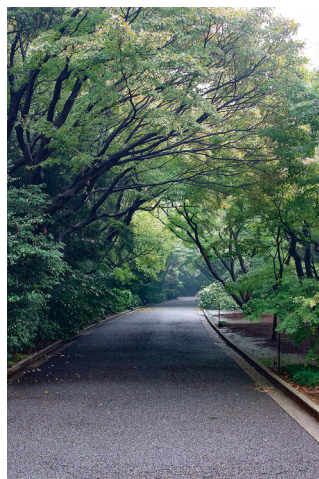
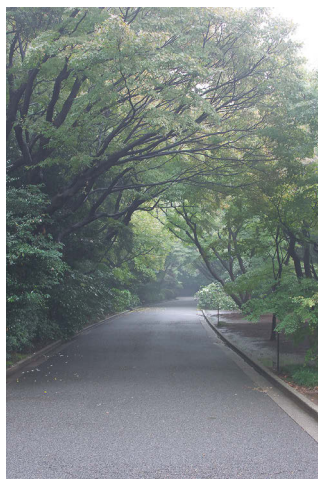
ノイズパネルで生成したノイズのバリエーション。写真素材ととてもよくなじむ、自然なノイズだ

「Camera Raw」がさらに進化。自由にシンプルなワークフローを実現

PhotoshopやAdobe BridgeプラグインのCamera Rawは、バージョン9.0でCamera Raw内でのHDR合成とパノラマ生成に対応した。さらにGPUアクセラレーションに対応したことでHDR/パノラマ生成も加速し、GPUが対応していればスクラップズームなどの素早い拡大縮小が可能になった。特に目を引くのが2014年末のAdobe MAX Sneak Peaksで発表、Camera Raw 9.1でついに実装されたDehaze (Defog)、「かすみの除去」機能だ。もちろんこれらの新機能は、同じエンジンを積むLightroom CC 2015.1以降

でも利用可能になっている。Camera Raw 9.2では円形補正、補正ブラシなどの部分補正でもかすみの除去機能を使えるようになり、さらに利用範囲が広がった。

Photoshop CCからすでにCamera Rawはフィルタとして使い、またRawデータ自体をスマートオブジェクトレイヤーとして使うこともできていたが、「かすみの除去」をPhotoshop上で使えるようになったことでさらにレタッチの自由度と精度は高まるだろう。



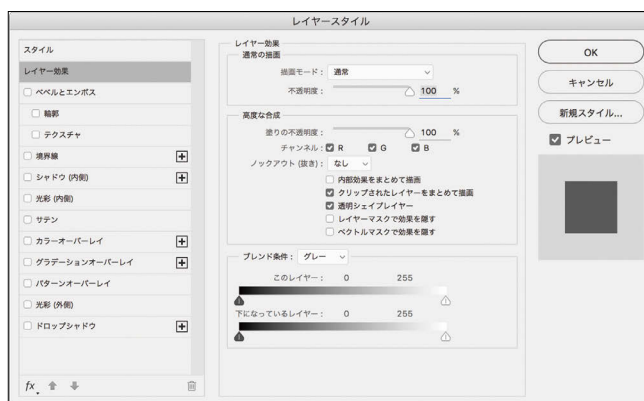
「かすみの除去」を左の霧のかかった風景に適用し、霧を除去してクリアにした(右)。一つのスライダーのみでこの結果を得られる

「かすみの除去」が有効なのは霧だけではない。レンズに強い光が入った時にシャドウが浮いてしまう「フレア」がかった写真や、普及価格帯のコンパクトデジタルカメラなどでよく見られる、コントラストの低いぼんやりした写真などにも有効なので、積極的に試してみたい。彩度がかなり上がるため、まずホワイトバランスを適正に処理したあとに「かすみの除去」を使用し、彩度を適度に調整してやると良い結果になる

「レイヤースタイル」機能の進化でデザインワークをより効率的に

Photoshop CC 2015では、ドロップシャドウ、境界線などの一部のレイヤースタイルを複数適用できるようになった。これまで複数のレイヤーを組み合わせて表現していた複雑なデザインも、1枚のレイヤーのみのシンプルな構成に落とし込める。

レタッチの面でも恩恵がある。これまで3Dアプリで作成していたような合成素材を、ちょっとしたものであればより処理の軽いレイヤースタイルでリアルさを追求することも検討対象としてよいだろう。



レイヤースタイルの初期状態ダイアログ。境界線やドロップシャドウなど、プラスアイコンのある効果が10個まで増やせるようになった。使用していない効果を非表示にしてすっきりと分かりやすく表示することもでき、増やした効果同士を入れ替えることもできる。ただ今のところは基本の効果の順番は図の通りで、グラデーションオーバーレイをカラーオーバーレイの上にするなどの大項目の入れ替えはできない

Adobe

複雑なドロップシャドウや境界線の重ねがけが簡単に。このような表現も特別なテクニックを使わずに試せる

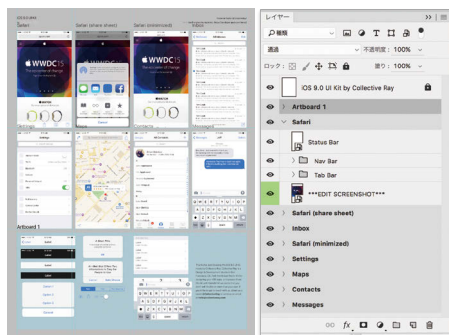
topic

011

Photoshopにアートボード 搭載、デザイン整理が簡単に

Photoshop CC 2015にマルチアートボード機能が搭載された。レイヤーベースのPhotoshopで実現するために、各アートボードは拡張されたレイヤーグループを使用し、クリッピングされている。これまでPhotoshopで複数のレイアウトを作成するには、ガイドとスライスツールを使用して面倒な作業を行わなければならなかったが、アートボード機能により簡単に複数レイアウトを1ファイルで作成できるようになった。

ただし後方互換性はないため、必ずPSDファイルの互換性を優先して保存し、下位バージョンでは統合画像として開く。レイヤーを維持したまま別バージョンで開くと、アートボードはレイヤーグループとして開かれるが、レイアウトは一致しなくなるので注意しよう。



iOS 9 UI Kit - Artboards PSD by Brian Benitez

<https://dribbble.com/shots/2108395-iOS-9-UI-Kit-Artboards-PSD>

オブジェクトを別のアートボードに移動すると、レイヤー自体がアートボードグループへ移動される。アートボード「グループ」の描画モードは基本は透過だが、調整レイヤーを追加すると「通常」となり別のアートボードへ影響しなくなる。アートボードはページとしてPDFに書き出したり、個別のPSDファイルに書き出すこともできるため、旧バージョンへ受け渡す場合には書き出したファイルも渡しておく

topic

012

進化を続けるPhotoshopの 「コンテンツに応じる」系機能

「コンテンツに応じる」系機能、塗り潰しやスポット修復ブラシ、パッチツール、コンテンツに応じて拡大・縮小などは、Photoshopのバージョンを追うごとに速さや精度が増している。特にPhotoshop CC以降は毎バージョン感動するほど進化の度合いは大きい。初期には遅く、仕上がりがよくなく、「使えない」と思ったプロも多かったが今一度、試してみる価値は十分にある。キズ消しや物の移動など、もはやレタッチには欠かせない機能であり、高速化も含め今後の進化が非常に期待できるツールだ。



カエルを「スポット修復ブラシ」で簡単に消してみよう。上はPhotoshop CC 2014、下がCC 2015だ。2014版では消えているとは言いがたい。CC 2015では形すら残らず消えている。他にも、修復ブラシはリアルタイム描画され、パッチツールは移動後に合成パラメータを変更できるようになった

topic

013

GPU対応機能がますます拡充、高速化する画像処理アプリ群

GPU対応自体はPhotoshop CS3からあったが、拡大・縮小など画面表示の高速化は、Photoshop CS4がGPUをより使用ようになってからだ。この時Adobe BridgeもGPU処理に対応した。Photoshop CS6からは64bitとGPUのパワーをフルに活用するAdobe Mercury Graphics Engineを搭載、フィルタ処理など重い計算処理に積極的に使われるようになった。バージョンアップの度にGPU依存度は増しており、PhotoshopだけでなくCamera Rawも2015年リリースのバージョン9.1からGPUアクセラレーションを搭載、同年Lightroom CCも対応し、描画や処理は非常に速くなっている。レタッチで使用頻度の高い機能が高速化していくのはありがたい。

ただし、GPU自体も日進月歩で進歩しているが、Adobeアプリの要求システム構成もまたバージョンアップ毎に高度になってきている。数世代前の機種では既にGPU支援機能自体が使えないものもある。最新バージョンで常に良好なパフォーマンスを維持していくにはこれまでも頻繁にマシンをバージョンアップさせていく必要があるだろう。現行のMacはすべてGPUを後から換装することはできないが、Windowsであれば柔軟に対応することもでき、この点、Windowsマシンは優位である。AdobeアプリであればMac/Winの差はほぼなく、またカラーマネージメント面でもWindowsは整備されてきており、クリエイターはWindowsへの移行も、今後のシステム構築の際には視野に置くべきだろう。



Photoshop CC 2015ではコンテンツに応じる系機能の著しい高速化が実現。スポット修復ブラシをPhotoshop CS6と比較してみよう。左はPhotoshop CS6だ。少し大きいエリアを修復させようとすると、進行状況ダイアログが出てかなり待たされる。右はPhotoshop CC 2015だが、処理は一瞬で終わってしまい、進行状況ダイアログすら出ない。Adobeは最大120倍高速化したと謳っているが、体感的にはそれ以上だ



Camera Rawもバージョン9.1でついにGPUアクセラレーションに対応。ただし対応GPUはPhotoshopより少ない。未対応GPUを使用して環境設定の「グラフィックプロセッサを使用」にチェックが入っていると画像が青一色になってしまう。対応GPUを搭載していれば、拡大中にHキーとクリックで全体を見渡せる「パースアイビュー」や、ズームツール使用中に左右にドラッグすることで拡大・縮小できる「スクラプズーム」が可能になり、操作の快適度は格段に向上する

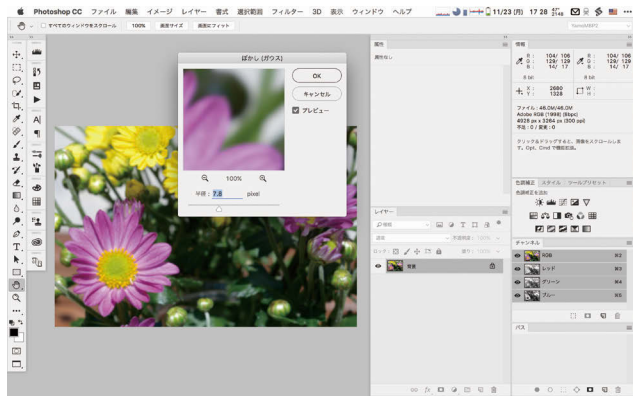


LightroomもGPU処理に対応しているが、Photoshopとは対応GPUの種類に差がある。Photoshopで問題なく使用できるGPUを搭載していても、未対応とされオフになることもある

PhotoshopのUIが一新。 フラットデザイン化

2015年12月に実施されたバージョンアップで、ユーザーインターフェイスが影や濃いラインの少ないフラットなデザインに一新された。UIとしてはCS4以降最大の変更になっている。より主張の少ないデザインだが、タッチ操作に対応した大きめのボタンなどこれからのPhotoshop操作方法の変化を見据えたものになっている。

また高密度ディスプレイへの対応もWindows版で正式対応し、ようやく両プラットフォームがHiDPIに対応した。Mac版PhotoshopはCS6からRetinaに対応していたが、これまでWindows版のHiDPI対応は実験的機能に留まっていた。CC 2015でWindows版もHiDPIモニタ対応が正式に実装された。

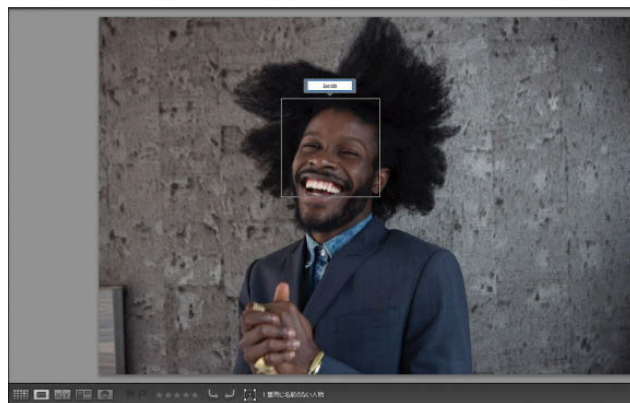


UIが一新されすっきりした見えになった。画像よりも主張しないデザインで集中できる

Lightroom CCが 顔認識機能を搭載

Lightroomは2015年4月発表のバージョンCCで高速化、HDR作成など多数のアップデートを果たしたが、その中でも注目されるのが顔認識機能だ。画像管理・編集アプリのライバルであったAppleのApertureが開発停止になり、選択肢はLightroomしかなくなったが、ApertureにあってLightroomに無かった機能がこの顔認識だった。日付や手動のキーワードだけでなく、顔を自動認識して名前をキーワードとして付加、検索インデックス作成がかなり自動化され、モデル毎のコレクション作成が楽になる。

LightroomにはApertureライブラリ読み込み機能がすでに標準で実装されている。今回のバージョンアップによりApertureからの移行がさらに進むだろう。

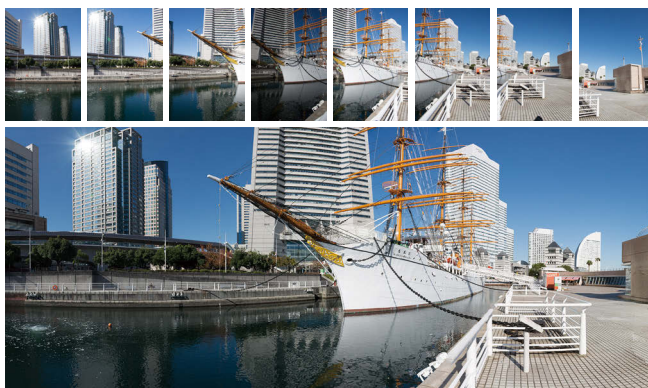


画像を読み込むと自動的に顔を検出し、設定済みの顔と似ていれば分類してくれる

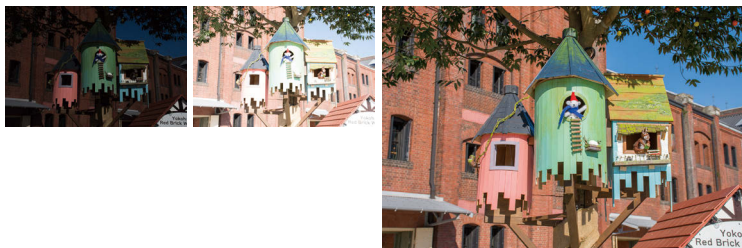
Lightroom/Camera Rawで高品位なHDR・パノラマ合成可能に

Lightroom CC、Camera Raw 9.0からHDR合成とパノラマ合成機能が使えるようになった。パノラマやHDR自体はPhotoshopにもあったが、LightroomやCamera RawではRawファイルを直に合成し、RawファイルであるDNG形式で書き出せる。つまり最初から最後までRawのまま処理できる上、Raw現像の柔軟な色補正を使った滑らかなトーンで合成できる。特にパノラマ合成は、設定できる項目こそPhotoshopのPhotomerge（フォトマージ）には劣るものの、合成部分のナチュラルで滑らかなトーンの繋がりにはPhotomergeでは得られない素晴らしさだ。

HDR合成もPhotoshopのHDR Proと比較すると設定項目は非常に少ないものの、適切にパラメータを設定したRawから合成することで非常に美しい無理のない仕上がりが得られる。仕上がったDNGファイルはもちろんRawのパラメータで現像可能だ。



8枚をLightroomでパノラマ合成した。露出の違うコマが混じるとPhotomergeではつなぎ目が見えることがあるが、Rawファイルは無理なく自動補正し他のコマと完璧に合わせ、まったくつなぎ目はわからない。合成の自由度はPhotomergeに及ばないが、これだけ美しい仕上がりがなるなら選択肢から外れることはないだろう



Rawで露出を変えてブラケット撮影し、LightroomでHDR合成。トーンの繋がりには無理がなく、いわゆる「HDR臭さ」をあまり感じさせない、とても素直な仕上がりになる。対応GPUを搭載したマシンであれば処理時間がかなり短縮される。気軽にHDRを試してみたいくなるだろう

Illustrator/InDesignの新機能

OVER VIEW

- ▶ Illustrator CC 2015.2に「Shaper」ツールが搭載
- ▶ Illustrator CC 2015では、変形パネルが機能強化、ライブシェイプ機能が充実
- ▶ InDesign CC 2015では、表組みにおいて「グラフィックセル」の機能が追加
- ▶ InDesign CC 2015では、「段落の背景色」で段落に対して背景色の設定が可能に
- ▶ InDesign CC 2014で搭載されたカラーテーマとAdobe Capture CCとの連携が可能に

レイアウト作業を主目的とするAdobe IllustratorやInDesignにも、CC 2014、CC2015においていくつかの機能強化が図られている。

Illustratorでは、**タブレットのタッチ操作でオブジェクトの描画が簡単にできる「Shaperツール」が搭載された**。これからの普及が予想されるタブレット型のデバイスに対応するためのツールであるが、マウスでの操作も可能になっている。また、変形パネルでは、長方形、角丸長方形に加えて、**楕円形、多角形、線のプロパティが数値で編集できるように機能強化された**。

Illustratorの作業環境においても、より使いやすい機能強化がなされている。GPUへの対応で、**画面表示の拡大倍率が64000%まで可能になった**。また**作成中のファイルを自動保存する「ファイルの**

復元」機能が追加され、安心して作業に集中できるようになったのもうれしいニュースである。

InDesignでは、CC 2014で追加されたカラーテーマツールやパネルが、モバイルアプリのAdobe Capture CCと連動して、より使いやすくなっている。CC 2015においては、表組み内のセルに画像を直接配置して、自動的にサイズ調整されるようになった。

InDesignのテキスト編集においては、CC 2015で**「段落の背景色」機能が搭載され、簡単な操作で段落の背景にカラーを設定できるようになった**。また、異体字を持つテキストを選択した際には、**テキスト下に異体字が表示され、切り替えもスムーズに行えるようになった**。人名などを入力・編集する際に重宝する機能強化と言えるだろう。

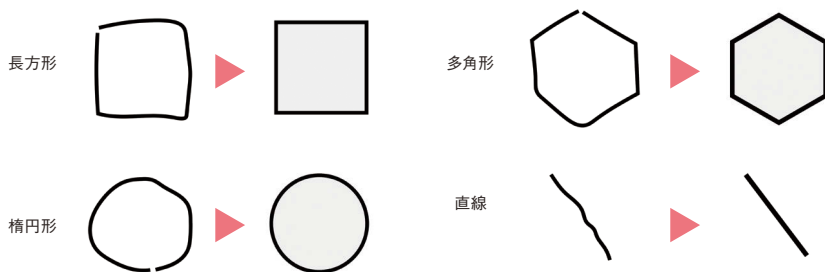
topic

017

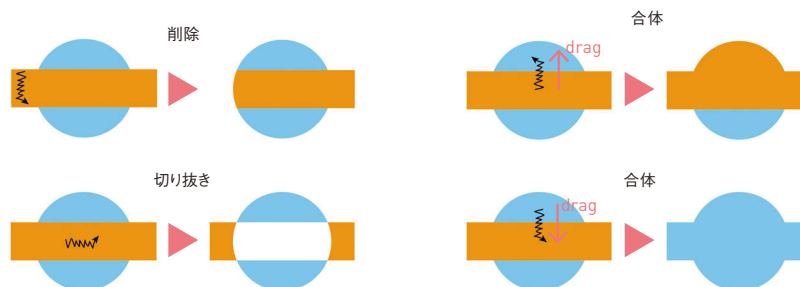
タブレット操作を意識した「Shaperツール」 ラフな描画でシェイプを作成可能

Illustrator CC 2015.2で登場した新ツール「Shaperツール」は、パソコンでのマウス操作やタブレットでのタッチ操作で基本図形のシェイプ描画が可能になるツールだ。タッチワークスペースとShaperツールを組み合わせることで、SurfaceなどのWindowsタブレットでの操作性が格段に向上する。これまでの基本図形のツールよりもラフな描画でシェイプが作成できるようになる。描画できるのは、長方形、楕円形、多角形、直線の4種類のシェイプとなる。

Shaperツールはオブジェクトを作成するだけではなく、複数のシェイプが重なっている場合に、Shaperツールによるアクションで部分的なエリアやオブジェクトの合体・切り抜き・削除が可能になる。さらに合体・切り抜き・削除をしたシェイプはShaper Groupとして編集可能な状態のままとなる。Shaper Groupは面の選択モードと設計モードを切り替えることができ、面の選択モードではカラーの変更が、設計モードではそれぞれのオブジェクトのプロパティや外観を変更することが可能になる。



Shaperツールでラフに描画して、精密な幾何学図形の作成が可能



複数のシェイプが重なっている場合、Shaperツールによるアクションで部分的なエリアを合体・切り抜き・削除が可能になる。上記のようなオブジェクトの場合、合体では前面オブジェクトから背面オブジェクトの一部のエリアへのアクションでは2つのエリアのみの合体になり、背面オブジェクトの一部のエリアから前面オブジェクトへのアクションでは2つのオブジェクトが合体される

変形パネルが機能強化。作成後も編集可能なライブシェイプ機能が充実

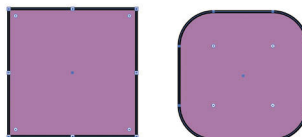
Illustrator CC 2015では、長方形・角丸長方形・楕円形・多角形・直線の形状を後から自由に変更できるライブシェイプ機能が強化された。シェイプ選択時に表示されるウィジェットをドラッグ操作して編集するか、変形パネルのパラメータで変更できる。

長方形や角丸長方形の場合は、コーナーウィジェットをドラッグするか変形パネルのプロパティで角の丸みを変更することができるほか、角の形状も変更することができる。多角形の場合は、辺ウィジェットをドラッグするか変形パネル

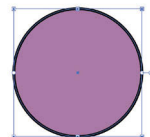
のプロパティで多角形の辺の数を変更したり、角丸ウィジェットのコントロールで角の丸みを変更することができる。円の場合は、円ウィジェットをコントロールすることで円をグラフ状に変形することができる。線分の場合は、ウィジェットの端をコントロールすることで線分の長さや角度を変更することができる。

これらの操作がすべてシェイプの描画後に変更できるようになったことで、Shaperツールと組み合わせればタッチパネル操作での描画が楽にできるだけでなく、複雑な形状も簡単な操作で描画することが可能になった。

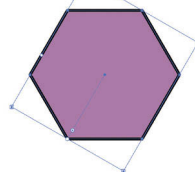
長方形・角丸長方形



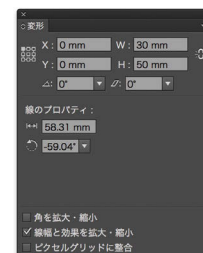
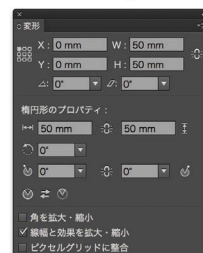
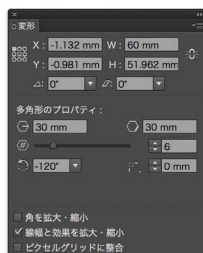
楕円形



多角形



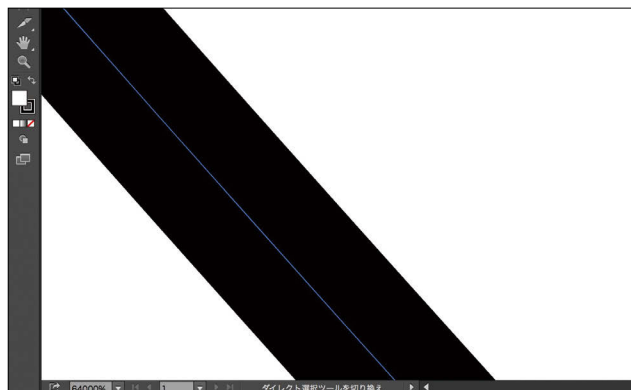
線



変形パネルには[長方形のプロパティ] [楕円形のプロパティ] [多角形のプロパティ] [線のプロパティ]が表示され、数値を入力して変形できる

GPUへの対応で画面表示の拡大倍率が64000%に

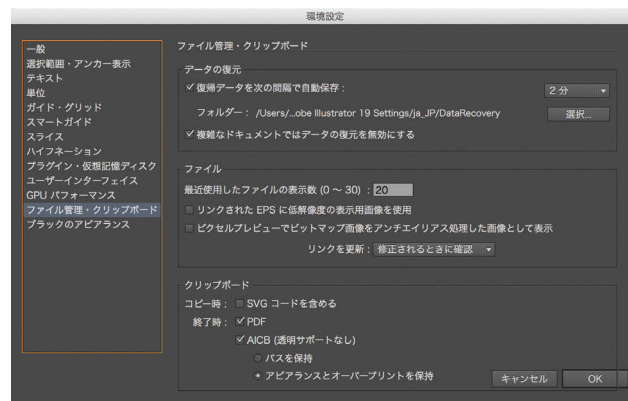
Illustrator CC 2014ではWindowsのみNVIDIAのグラフィックボードが搭載されているとGPUを使用して処理を高速化することが可能だったが、CC 2015ではMacでもGPUが利用できるようになった。拡大縮小時の表示がスムーズになったり、アニメーションズームが有効にできたり、画面の表示倍率が64000%まで表示できるようになる。ただしMacに512MB以上のVRAM（推奨:2GB）があり、OpenGLのバージョン4.0以降がサポートされている必要がある。



繊細な作業では、これまでの6,400%までの拡大率では見づらいケースもあったので、ユーザにとっては地味だが嬉しい機能強化だろう。

ファイルの復元機能とセーフモードでの起動が可能

Illustrator CC 2015では、InDesignやPhotoshopに搭載されていた、作成中のファイルを自動保存する「ファイルの復元」機能が追加された。「環境設定」で機能のオン/オフや保存間隔、バックアップファイルの格納場所、複雑なドキュメントでのデータ復元の無効化が設定できる。また、Illustratorがクラッシュした際の再起動時には、診断を実行してセーフモードで起動するようになった。セーフモードではクラッシュの原因となったフォントやプラグインがセーフモードダイアログに表示される。



環境設定の「ファイル管理・クリップボード」の「データの復元」では、自動保存のオン/オフや保存間隔などの設定ができる。

topic

021

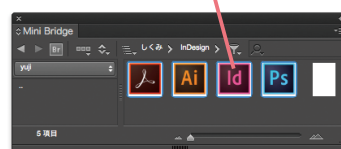
「グラフィックセル」 表組における画像の取り扱いが向上

InDesign CC 2015では、表組みにおける画像の取り扱いが大きく向上した。これまでのバージョンでもセル内に画像を配置することは可能だったが、CC 2015ではさらに操作性が向上し、グラフィックセルという機能が追加された。これはその名の通り、セルをグラフィック用に交換してコントロールする機能だが、これまでと違うのは画像のサイズ調整が格段に便利になったことだ。たとえば、セル内に配置する画像がセルより大きな場合、以前であれば画像があふれて表示されないため、あらかじめ画像のサイズを調整しておく必要があった。これは画像をインラインとして配置していたためだ。しかしCC 2015では、画像がセルよりも大きい場合には、セル内に収まるよう自動的にサイズ調整され配置される。もちろん、配置した画像は通常のグラフィックオブジェクト同様、さまざまなコントロールが可能だ。

実際の作業では、複数の画像をまとめてセル上にドラッグ&ドロップで配置していくと便利。画像が配置されたセルは自動的にテキストセルからグラフィックセルに変わる。また、複数のグラフィックセルを選択した状態で、[オブジェクトサイズの調整] コマンドも実行できる。文字ツールのままコマンドが実行できるため、ツールを持ち替えなくてもOKだ。

なお、表組みに関する機能でいえば、CC 2014で搭載された行や列をドラッグ&ドロップで移動できる機能もとても便利だ。表組みに関する機能も、地味ながら少しずつ進化している。

Illustrator		進化し続けるベクトルグラフィックツール
Photoshop		世界最高峰のプロフェッショナル画像編集ツール
InDesign		印刷および電子出版のためのプロフェッショナルデザインツール
Acrobat		PDF 文書およびフォームの作成、編集、署名の追加



Mini Bridgeやデスクトップから画像をセル上にドラッグ&ドロップすることで、セル内に画像を配置できる

Illustrator		進化し続けるベクトルグラフィックツール
Photoshop		世界最高峰のプロフェッショナル画像編集ツール
InDesign		印刷および電子出版のためのプロフェッショナルデザインツール
Acrobat		PDF 文書およびフォームの作成、編集、署名の追加

セル内に配置した画像は、まとめて[オブジェクトサイズの調整]コマンドを実行することも可能

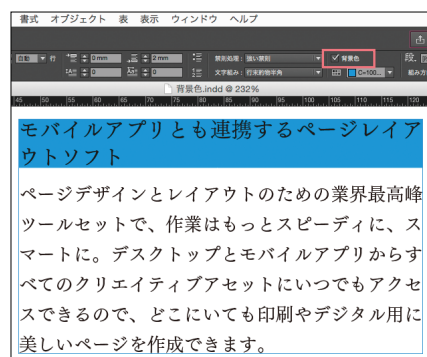
topic

022

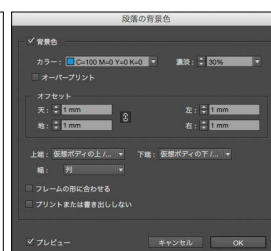
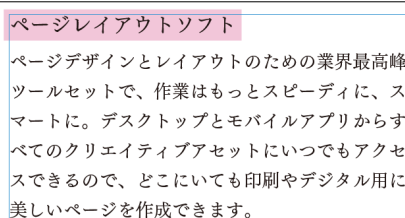
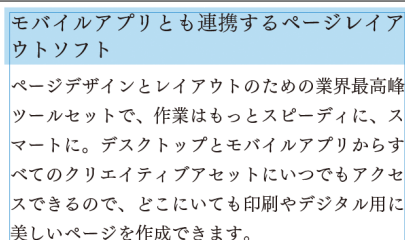
「段落の背景色」 段落全体の背景にカラーを設定可能に

InDesign CC 2015では、段落に対して背景色の設定が可能となった。これは、HTMLのプロパティで言う「background-color」に当たるもので、段落全体の背景にカラーを設定したい場合に使用すると便利だ。これまで、段落境界線や下線の機能を利用することで、テキストの背景にカラーを設定していた方も多いと思うが、CC 2015では簡単な操作で背景色の設定が可能になったわけだ。もちろん、段落全体ではなく、テキストの存在する部分だけに背景色を設定したり(テキストが1行の場合のみ)、オフセットの値も指定可能だ。ただし、残念ながら段落境界線の機能を応用して作成していた枠囲みのような処理まではできない。

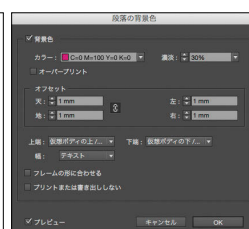
背景色の設定方法は、段落パネル、あるいはコントロールパネルで[背景色]にチェックを入れ、カラーを選択するだけと非常に簡単だが、オフセットやカラーの濃淡、上端や下端を設定したい場合には、段落パネルメニューから[段落の背景色]ダイアログを表示させて設定する必要がある。なお、設定する段落が1行の場合には、[幅]を[列]から[テキスト]に変更することで、テキストの長さに応じた背景色を設定することも可能だ。さらに、テキストフレームが矩形以外の場合には、フレームの形に合わせた背景色も設定できる。



段落パネル、あるいはコントロールパネルで[背景色]にチェックを入れ、カラーを選択するだけで、指定した段落に対して背景色が適用される



[段落の背景色]ダイアログでは、[カラー]や[濃淡]、[オフセット] [上端] [下端]等が設定可能



段落のテキストが1行の場合、[幅]を[テキスト]に設定することで、テキストの存在する部分のみに背景色を適用できる

選択された文字の異体字を表示、切り替えが可能に

InDesign CC 2015の11月アップデート(11.2.0.99)により、選択された文字の異体字を表示する機能が新しく追加された。これは、文字ツールでテキストを選択した際に、選択したテキストの右下に異体字を表示させ、すぐに目的の異体字に切り替えることのできる機能だ。これまで、異体字への切り替えは、字形パネルを表示させて行っていたと思うが、わざわざ字形パネルを表示させることなく、異体字への切り替えが可能となったわけだ。

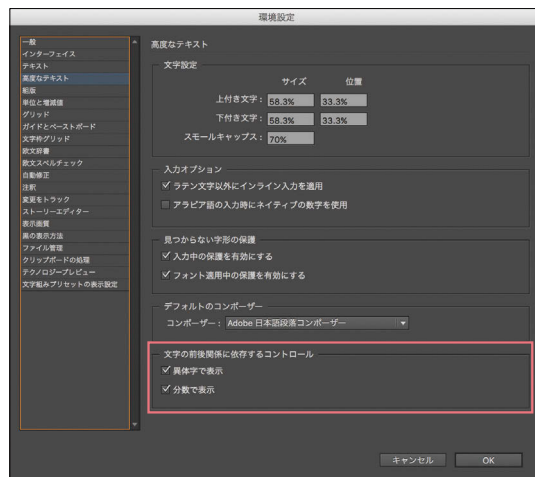
なお、テキストの右下に表示される異体字の数は最大で5つまで。それ以上の数の異体字を持つ字形の場合には、表示された異体字の一番右に表示される三画マークをクリックすればよい。字形パネルが表示されるので、これまで同様、字形パネルから目的の異体字を指定することができる。ちょっとした改善点だが、字形パネルを開く手間を減らせるため、意外と嬉しい機能追加といえる。



異体字を持つテキストを選択すると、テキスト下部が青くハイライトされ、異体字が表示される。あとは目的の異体字を選択すれば異体字に切り替えられる



分数の異体字への切り替えも可能



環境設定の「高度なテキスト」には「文字の前後関係に依存するコントロール」という項目が追加された。ここで、テキストを選択した際の、異体字や分数の表示をする／しないを設定できる。デフォルトではオンになっている

「カラーテーマ」 画像やオブジェクトからカラーテーマを作成することが可能

InDesign CC 2014でカラーテーマツールが搭載され、画像等のオブジェクトから手軽にカラーテーマを作成することが可能となった。カラーテーマとは5つのカラーのグループで、アプリケーションをまたいで使用できる。最近では、無料のモバイルアプリであるAdobe Capture CCを使用することでもカラーテーマが作成可能となり、ますますカラーに関する機能も充実してきた。iPhoneやAndroidのスマホ等にCapture CCをインストールすることで、街で見つけた素敵な風景やポスター等から仕事で使いたい色を手軽に拾うことができるというわけだ。

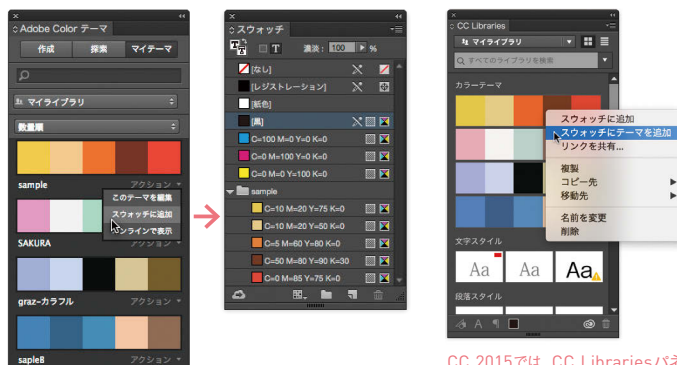
Capture CCで作成したカラーテーマは、自分のCreative Cloud Librariesに保存し、すぐにInDesign CCやIllustrator CCで使用するこ

とができるが、そのままだとRGBカラーのまま。そこで、Adobe Colorテーマパネルを使用して、カラーをCMYKに変換して使用するのがお勧め。Adobe Colorテーマパネルでは、RGBをCMYKに変換できるのはもちろん、CMYKの値を切りのよい数値に丸めることも可能だ。変換したカラーテーマは、スウォッチとして保存しておくとし使い勝手も良い。なお、CC 2015(11.2.0.99)では、CC Librariesパネルのカラーテーマをスウォッチとして保存する機能が追加されている。ちなみに、Adobe Colorテーマパネルでは、世界中のクリエイターが保存したカラーテーマも閲覧できるので、気に入ったカラーテーマがあれば、スウォッチとして保存しておくとうまいだろう。



Adobe Colorテーマパネルでは、自分のCreative Cloud Librariesに保存したカラーテーマを編集することができる

Adobe Colorテーマパネルの「作成」タブでは、RGBカラーをCMYKカラーに変換したり、各版の値を調整することができる



編集後のカラーテーマは、[スウォッチに追加]をクリックすることで、グループとしてスウォッチに追加できる

CC 2015では、CC Librariesパネルのカラーテーマをスウォッチとして保存できる

モバイル系ソフトウェア

OVER VIEW

- ▶ モバイルやタブレット型端末でカンパを作成する「Adobe Comp CC」
- ▶ 4つのモバイルアプリが1つに統合した「Adobe Capture CC」
- ▶ ベクトル形式のイラストが作成できる「Adobe Illustrator Draw」
- ▶ ペンタブを使ったスケッチ感覚で描ける「Adobe Photoshop Sketch」
- ▶ Photoshopの機能をモバイルアプリで実現した「Photoshop Mix」「Photoshop Fix」

ここ最近のアドビシステムズ社がかなり力を入れて開発しているのが**モバイル系のアプリケーション**だ。2015年12月現在、20数個のモバイルアプリがダウンロード可能となっており、そのほとんどが無料だ。とくにCreative Cloudがリリースされてからその数は一気に増えており、**Creative Cloudと連携**できることで、その存在価値もますます大きなものとなってきている。

モバイルアプリで作成したものは、基本的に自分のクラウドスペースに保存され、デスクトップアプリから利用することが可能だ。コピーなどといった煩わしい操作も必要ないため、ユーザーはとくに意識すること

なく連携の恩恵を受けられる。これが「**Creative Sync**」の大きなメリットで、今後ますますこの流れは加速していくはずだ。実際に使用してみるとわかるが、その連携の流れはスムーズで、多くのユーザーがスマートフォンを持っている現在では、その恩恵ははかりしれない。

モバイル系ソフトウェアは大きく、**キャプチャアプリ**、**デザインおよびイラスト系アプリ**、**映像系アプリ**、**写真系アプリ**に分けられるが、そのどれもが**複数のデスクトップアプリと連動して使用**できる。これまでのワークフローを大きく変えていくことができる可能性を持っているので、ぜひ積極的に利用することをお勧めする。

topic

025

「Adobe Comp CC」 モバイルやタブレットデバイスでカンパを作成

Adobe Comp CCは、その名のとおりカンパを作成するモバイルアプリだ。2015年12月現在、iPhoneおよびiPad向けに無償でリリースされており、タッチ操作のみで写真やテキストを配置した高度なレイアウトが可能。Adobe Creative Cloudとの連携はもちろん、Photoshop MixやPhotoshop Fix等、他のAdobeのモバイルアプリとも連携できる。作成したデータは、PhotoshopやIllustrator、InDesignに送信することができるため、作成したカンパをデスクトップアプリで開いて仕上げたり、修正したりして、実際のデータとして作業を続けられるのが大きなポイントとなる。

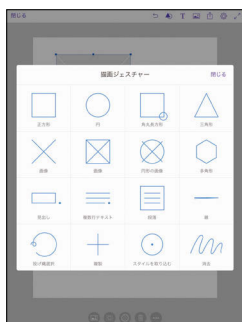
例えば、クライアント先で打ち合わせしながら、クライアントの要望を手書きでカンパとして作成することはよくある。これを手書きではなく、Comp CCに置

き換えれば、クライアントにもイメージが伝わりやすい。さらに、できあがったカンパをデスクトップアプリに送れば、作成したカンパをそのまま再利用できるというわけだ。実際にComp CCの操作をしてみると分かるが、簡単なジェスチャーさえ覚えれば、図形や写真、テキスト等のレイアウトを簡単に行える。サイズや位置の調整、カラーの設定をはじめ、Creative Cloud LibrariesやCreative Cloud Market、Adobe Stockやその場で撮影した画像等も使用できる。また、テキストもTypekitフォントを指定可能だ。

なお、ロサンゼルスで行われたAdobe MAXでは、iPad Proに最適なアプリの1つとして紹介されており、Apple Pencil等のスタイラスペンを使えばさらに操作性が増すことは間違いないだろう。



Adobe Comp CCでは、タッチ操作のみでかなり高度なカンパが作成可能



指定された描画ジェスチャーを実行することで、目的のオブジェクトを描画できる



テキストはTypekitから、グラフィックはライブラリやCreative Cloud Market、Adobe Stockの画像も使用できる



作成したカンパは、Behanceに公開したり、PhotoshopやIllustrator、InDesignに送信することができる

「Adobe Capture CC」 従来のモバイルアプリが1つに統合

Adobe Capture CCは、Adobe Shape CC、Adobe Brush CC、Adobe Color CC、Adobe Hue CCの4つのモバイルアプリが1つに統合されたもので、iPhone&iPad、およびAndroid用に無償でリリースされている。その名のとおり、キャプチャーした画像からベクター画像やブラシ、カラーテーマ、Lookを作成してくれるアプリだ。手軽な操作で実行できるため、これまでスキャンニングで行っていた作業のいくつかを、Capture CCに置き換えていくことができる。

例えば、ちょっとした手書きのイラストであれば、わざわざスキャナーを使用しなくてもCapture CCで簡単にベクター画像を作成できる。ポジフィルムがデジカメのデータに置き換わっていった時のように、今後はスマートフォン等のモバイルアプリでできることが増えていくのは間違いのないところだろう。うまくワークフローに取り入れて、今後の作業に活用していただきたい。

Adobe Capture CC [COLORS]

[COLORS]は、キャプチャーした写真等からカラーテーマを作成することができる機能。作成されるカラーテーマは5つのカラーの集合体で、街で見かけた素敵な景色やポスターで使用されているカラー5つをグループとして拾ってくれる。スマートフォンで写真を撮るだけの作業で、基本的にはアプリが自動でカラーを拾ってくれるが、タップして任意のカラーを指定することもできる。保存したカラーテーマは、自動的に自分のライブラリに保存されるため、そのままデスクトップアプリで使用できる。



[COLORS]では、キャプチャーした写真等からカラーテーマを作成することができる。カメラで風景等を写している場合には、画面上をタップすることで表示を固定できる。また、拾いたいカラーを指でタップして、直接指定することも可能

Adobe Capture CC [SHAPES]

[SHAPES]は、キャプチャーした写真やイラスト等からベクター素材を作成することができる機能。パスとして認識する部分の量の調整をはじめ、パスとして取り込みたい範囲の調整も可能。まさに、Illustratorの「画像トレース」の機能がモバイルアプリに搭載されたものと言っている。実際に試してみると分かるが、素早く、そして手軽に画像をベクター化できる。高度なスキャンニングが必要な画像でなければ、Capture CCで充分な品質を得られるだろう。とくに手書きのイラスト等に威力を発揮する。

もちろん、作成されたベクター画像は自動的に自分のライブラリに保存できるため、使い勝手も抜群だ。ぜひ、仕事に活かして欲しい機能の一つだ。

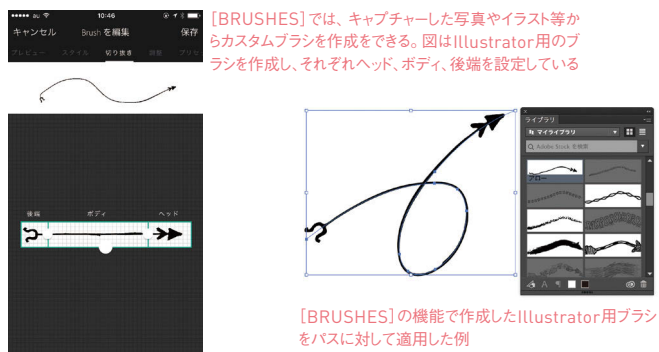


[SHAPES]の機能で作成したベクター画像は、Illustratorでパスを編集可能

Adobe Capture CC [BRUSHES]

[BRUSHES]は、キャプチャーした写真やイラスト等からカスタムブラシを作成することができる機能で、PhotoshopやPhotoshop Sketch、Illustrator用にブラシを作成できる。ホワイトマスクの調整をはじめ、マスクする領域の追加・削除も可能。また、ブラシの[サイズ]や[角度][間隔][ジッター]等、作成するブラシに応じたさまざまな設定もできる。かなり詳細な設定ができるので、気軽にキャプチャーして色々なブラシを作成してみたい。仕事に便利なブラシをたくさん追加できるはずだ。

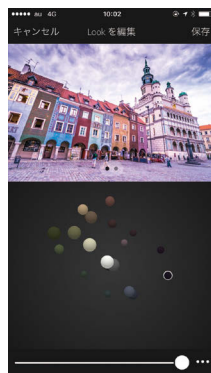
なお、Adobe MAXでは、Adobe Capture CCにパターンを作成する機能の追加も発表されているが、2015年12月現在、まだパターンを作成する機能は追加されていない。



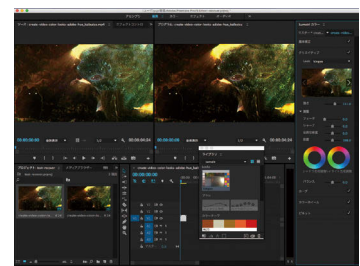
[BRUSHES]の機能で作成したIllustrator用ブラシをパスに対して適用した例

Adobe Capture CC [LOOKS]

[LOOKS]は、撮影した写真等から色彩や光をキャプチャーし、ユニークなLookとしてPremiere ProやAfter Effectsのビデオプロジェクトの編集に利用できる機能。キャプチャーしたLookは、サンプル画像を見ながら各カラーバブルを使用して彩度調整をしたり、全体的な強度の高低を調整できる。作成したLookをライブラリに保存すれば、自動的に同期が完了するというわけだ。あとは、Premiere ProやAfter Effectsで作成したLookをドラッグしてシーケンスに適用すればよい。もちろん、デスクトップアプリ上で色温度やコントラスト、彩度の調整も可能だ。



[LOOKS]では、サンプル画像上でスライダーを調整し、全体的な強度の高低を調整する



Lumetriカラーパネルでは、指定したLookに対してさまざまな調整を行うことができる

topic

027

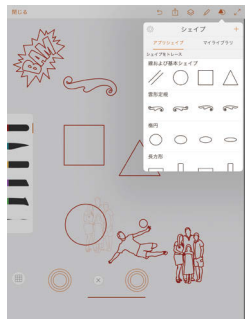
「Adobe Illustrator Draw」 ベクトル形式のイラストが作成できるモバイルアプリ

Adobe Illustrator Drawは、iPad、iPhone、Androidフォンに対応した無償のモバイルアプリで、その大きな特徴はベクトル形式のイラストが作成できる点だ。あらかじめ5つのベクターブラシが用意されており、手書きでなぞったイラストも自動的にベクターデータとして反映できる。最大で10個の描画レイヤーと1つの写真レイヤー、そして遠近グリッドや各レイヤーの不透明度の調整、さらには美しい直線やシェイプを描画する機能、および雲形定規やスタンプまでも備えている。

また、Creative Cloud LibrariesやMarket、Adobe Stock、Behance

との連携はもちろん、Adobe Capture CCのShapeで作成したベクターデータもそのまま取り込める。描画したデータは、IllustratorやPhotoshopに送ることもでき、送信したデータは自動的にデスクトップアプリで表示される。イラストはIllustrator Drawで描き、仕上げや調整はデスクトップアプリで行うといったワークフローが可能だ。

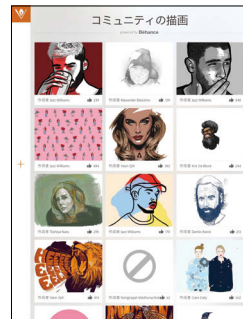
なお、Adobeの筆圧感知ペン「Adobe Ink」とデジタル定規「Adobe Slide」にも対応しており、これらのデバイスをお持ちのユーザーは、より描画をコントロールしやすいだろう。



Illustrator Drawでは、手書きのイラストだけでなく、美しいシェイプも描画可能。基本的なシェイプだけでなく、雲形定規やスタンプも用意されている



描画したイラストは、IllustratorやPhotoshopに送信したり、Behanceで公開、あるいはCreative Cloudやクリップボードにコピーすることができる



Behanceで公開された多くの作品は、Illustrator Drawからも閲覧することができる

topic

028

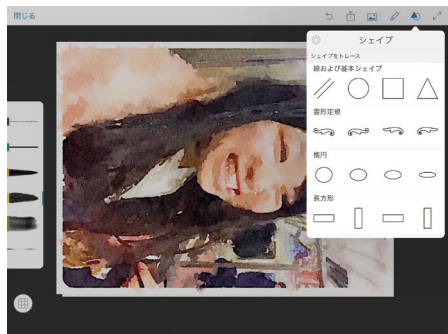
「Adobe Photoshop Sketch」 ペンタブを使ったスケッチ感覚で描けるモバイルアプリ

Adobe Photoshop Sketchは、iPad専用（2015年12月現在）のモバイルアプリ。鉛筆やペン、マーカー、水彩、アクリル、パステルブラシといった、おなじみの描画ツールを使って、まるで紙に描いたような質感や効果を表現できる。実際に描いてみると分かるが、ペンタブを使ってPhotoshop上で描画するのと同じ感覚で絵を描くことができる、まさにSketchという名前がぴったりのアプリだ。

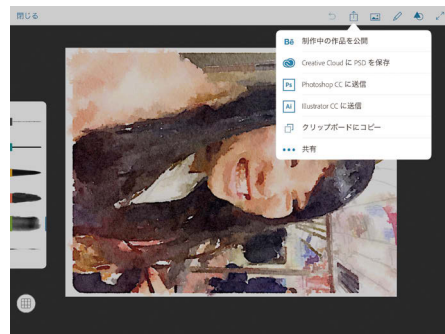
なお、Illustrator Drawと同様、基本的なシェイプの機能も用意されており、美しい図形を描画することも可能だ。ただし、Illustrator Drawのようなス

タンプまでは搭載されていない。もちろん、これらのツールは指によるジェスチャーが使える。

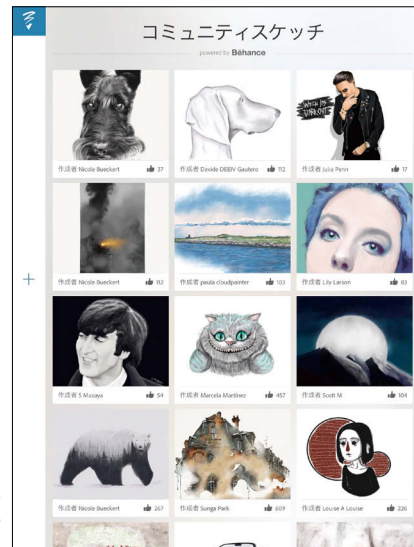
また、Photoshop Sketchでは、Adobe Ink & Slideをはじめ、Adonit、Wacom、Pencil by 53の筆圧感知ペンをサポートしている。自分に合ったツールを探して、描画するとよいだろう。なお、以前リリースされていたAdobe Illustrator Lineというモバイルアプリは現在削除され、機能やツールは、Photoshop SketchおよびIllustrator Drawに統合されている。



Photoshop Sketchには、基本的なシェイプも用意されている



描画したスケッチは、IllustratorやPhotoshopに送信したり、Behanceで公開、あるいはCreative Cloudやクリップボードにコピーすることができる



Behanceで公開された多くの作品は、Photoshop Sketchからも閲覧することができる

「Photoshop Mix」 切り抜きや合成、色調補正などの機能を搭載したモバイルアプリ

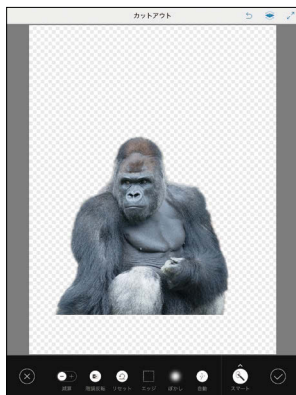
Photoshopの編集機能をモバイルアプリで実現したのがAdobe Photoshop Mixだ。画像の切り抜きや合成、カットアウト、色調補正やブレンド、外観を適用する機能等、Photoshopでおなじみの機能のいくつかを、モバイル上（iPad、iPhone、Androidに対応）で実現できる。例えば、カットアウトを実行すると、指でなぞるだけで背景を透明にできる。エッジやぼかしの調整もでき、タッチ操作だけでそれなりの切り抜きが実現できてしまう。もちろん、細かな調整はPhotoshopにはかなわないが、色温度や露光量、コントラスト、ハ

イライト等の補正をはじめ、レイヤー合成やブレンドなども手軽に実行できる。ちょっとした作業なら、Photoshopがなくても問題ない。

また、PhotoshopやLightroomのデスクトップアプリをはじめ、ライブラリやBehance、Facebook、Instagram等にも画像を保存、あるいは送信できる。出先で簡単な切り抜きや合成、補正等をタブレットで行い、会社に戻ってから続きを作業したり、細かな調整を行うといったワークフローが実現できる。仕事にも使える便利なモバイルアプリが、Photoshop Mixだ。



【外観】ボタンをタップし、「ナチュラル」や「ポートレート」等、目的のものを選択するだけで、手軽に外観を調整できる



【カットアウト】ボタンをタップし、指で不必要（あるいは必要）な部分をなぞるだけで、簡単に背景を切り抜きできる。エッジやぼかし等、細かな調整も可能だ



レイヤーの機能を利用して複数の画像を合成できる。【ブレンド】の機能を利用すれば、不透明度も設定可能

「Photoshop Fix」 修復やゆがみのレタッチ、ペイント、カラー調整等に強いモバイルアプリ

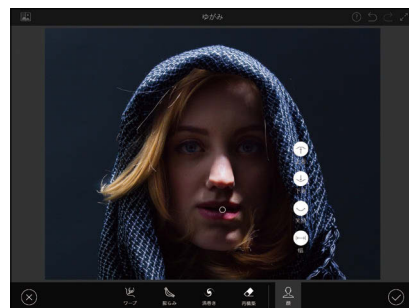
Adobe Photoshop Fixは、iPadおよびiPhone向けのモバイルアプリだ（2015年12月現在）。Photoshop Fixを使用することで、画像の修復やゆがみ、明るさ、カラー等の調整が可能となる。切り抜きや調整等、Photoshop Mixとかぶる機能もいくつかあるが、Photoshop Mixがカットアウトや合成に強いのにに対し、Photoshop Fixは修復やゆがみ等のレタッチ操作、およびペイント、カラーの調整、周辺光量補正等の編集操作に強い。

とくに【スポット修復】ツールや【パッチ】ツール、【コピー・スタンプツール】等、おなじみのツールを使用しての不要部分の削除といった操作は、Photoshop同様、高度な結果が得られる。また、Adobe MAXでも話題になった機能に【ゆがみ】の中の【顔】がある。この機能を使用すると、プリクラのように目を大きくしたり、口角を上げて笑顔にする機能も用意されており、面白い効果が適用できるので、ぜひ一度試してみてください。

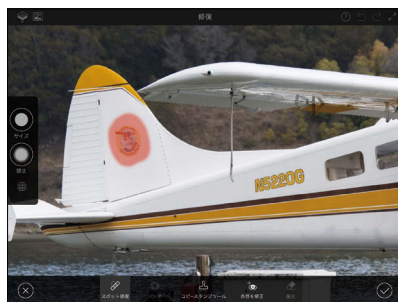
もちろん、他のモバイルアプリ同様、PhotoshopやLightroom、ライブラリやBehance、Facebook、Instagram等にも画像を保存、あるいは送信できる。モバイルアプリだからといって、バカにできない高機能なモバイルアプリだ。



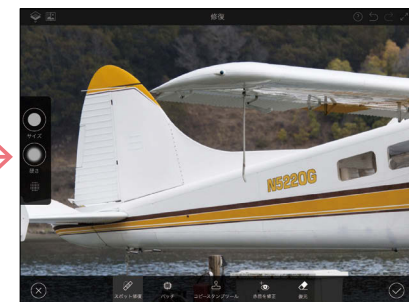
Photoshop Fixに用意されたさまざまな機能



【ゆがみ】の中の【顔】の機能を使用して、口角を上げて笑顔にした状態



【スポット修復】ツールを用いてドラッグするだけで、簡単に不要部分を削除できる



Adobe Creative Cloudで作る 本誌表紙の制作プロセス

OVER VIEW

- ▶ Adobe Creative Cloudの新しいサービスの提供で、DTPのワークフローに大きな変化の兆し
- ▶ Adobe Comp CCを利用して、新しいカンパ作成のワークフローを体験する
- ▶ Adobe Comp CCからデスクトップアプリケーションへのデータ転送の方法
- ▶ 本誌表紙の表面加工「ハイブリコート」の制作プロセスをレポート

Adobe Creative Cloud (以下、Adobe CC) は、2015年12月にデスクトップアプリケーションの大幅アップデートを行った。さらに**新しいモバイルアプリのリリースと従来のアプリの大幅な機能強化**を図り、これらのアプリがクラウドを通じて互いに連動する制作環境が整備された。さらに、**4,500万の画像や動画のコンテンツを利用できるAdobe Stock**も刷新され、大きな話題を呼んでいる。

これらの新しいサービスを組み合わせることにより、デザイン・DTP・

印刷の各分野で**新しいワークフローが生まれ始めている**。ここでは、**Adobe Comp CC**と**Adobe Stock**にフォーカスして、新しいツールをデザイナーや制作スタッフが活用することで、どのようなメリットが生まれるのかを検証してみたい。

また、本誌の表紙は毎回、特殊印刷を試みているが、今回は「**ハイブリコート**」と呼ばれる表面加工を行っている。その制作プロセスも合わせてレポートする。今後の制作のヒントとして役立てていただきたい。

topic

031 Adobe Comp CC / Adobe Stockで表紙のカンプを作成する

■ カンプ作成の新しい体験

デザイン作業の初期段階で行うラフスケッチは、紙に鉛筆書きしたり、パソコンに向かって作成したりと、人によってさまざまな流儀がある。

Adobe Comp CCは、スマートフォンやタブレット型のモバイル端末を使ってカンパを仕上げることを目的に開発されたまったく新しいツールだ。このツールを使えば、出先であろうと、自宅のリビングであろうと、気軽にスケッチを起こせる。基本操作は指先で図形を描いたり、ダミーテキストの配置も指先の操作で行えるなど、スムーズにできるように設

計されている。ラフ段階で、大まかな構図やオブジェクトの配置を決めるのに適しており、ブラッシュアップの作業は、デスクトップアプリケーションに転送して仕上げるができる。

ここでは実際の作業手順を追いながらAdobe Comp CCの機能をみていこう。Adobe Comp CCを立ち上げると、最初に新規カンパを作成するように促される。サイズは規定のものから選ぶこともできるし、サイズを指定することもできる。カスタマイズした設定は、保存して次回に繰り返し使用できる。注意点は、モバイルアプリなので、ピクセル単位でドキュメントが作られることだ。後述する

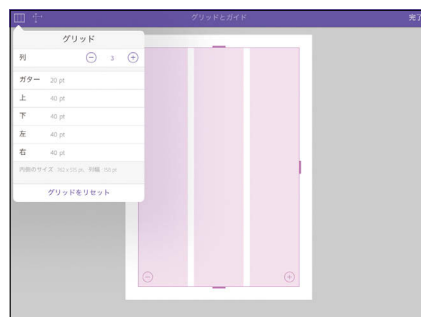
が、デスクトップアプリケーションに転送してファイルを開いたときに、プロジェクトに応じた単位設定に切り替える必要がある。

ガイドの設定が可能で、余白を定めたり、紙面を分割する水平・垂直のガター（段組ガイド）を作成できるようになっている。これらの作業を済ませて、オブジェクトを配置していく。図形やテキストは指先でラフな形を描くと、アプリ側で正確な形に補正して画面上に表示される。描き方により図形やテキストに変換されるため、最初に[描画ジェスチャーのヘルプ]を見ておくことをおすすめする。直感的でわかりやすい操作なので覚えやすいだろう。

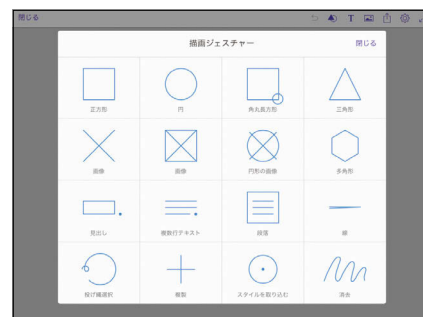
Adobe Comp CCで新規カンパを作成する



①新規に作成する場合は、上図のような画面が現れ、希望するサイズを選択。新しい形式の場合は、ピクセルでサイズ指定する

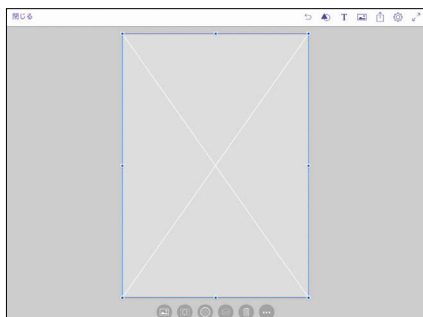


②ガイドは四角形の四辺に表示されるハンドルを動かして操作できる。数値で指定することも可能。また段組ガイドも設定できる

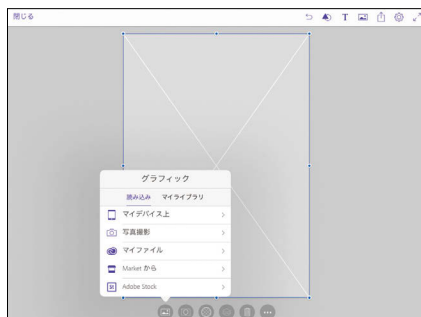


③右上の[設定]をタップして[描画ジェスチャーのヘルプ]を表示したところ。操作を忘れた場合に、いつでも参照できる

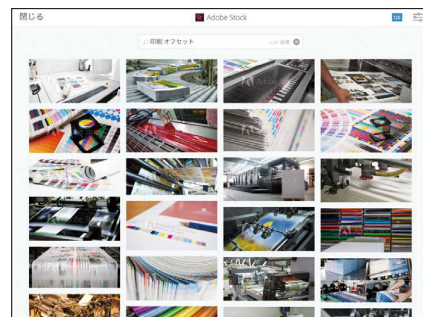
カンブの制作プロセス



①上図では「A4(縦)」を選んで新規カンブを作成、全体を覆う画像フレームを配置した



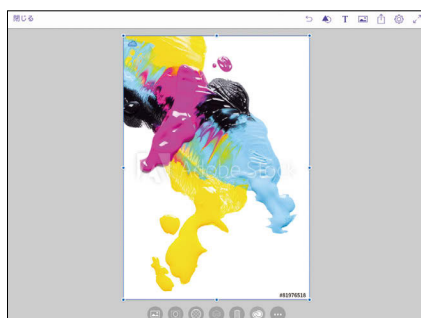
②画像フレームの中にグラフィックを配置する。デバイス上、写真撮影、マイファイル、Market、Adobe Stockから選択できる



③Adobe Stockを選ぶと、キーワードで画像素材の検索が行える。「印刷 オフセット」と入力すると上図のような画面になった



④画像のリストの中からお気に入りのものをタップする。プレビュー保存では、保存先のライブラリ名を選択する



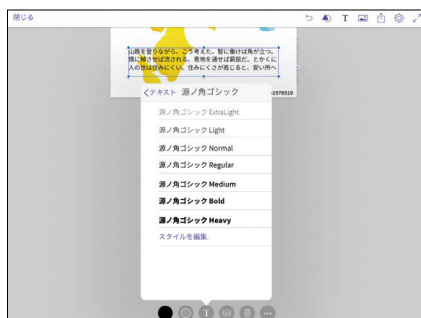
⑤画像フレーム内にAdobe Stockのプレビューが画像が取り込まれたところ。画像の位置、大きさを調整してトリミングする



⑥テキスト配置後、右側のスライダを動かしてサイズを変更できる。メニューを表示させると、フォント、スタイル、行揃えも設定可能



⑦テキストの間隔では「行間」「文字間隔」をスライダを動かして調整できる



⑧書体はTypekitを同期させて、さまざまな種類を選択できる。図では「源ノ角ゴシック」のファミリーを表示している



⑨右上のボタンから、制作中のカンブをInDesign、Photoshop、Illustratorに送信できる

■ Adobe Stockの活用

Adobe Comp CCでは、簡単な操作で画像の取り込みができる。モバイル機器に付属のカメラを使ってその場で撮影したものや、保存済みの画像を読み込んで配置することができる。しかし驚きなのは、Adobe Stockサービスの4,500万点以上の膨大なストックフォトから画像を検索して、即座にプレビュー画像を取り込むことができる点だ。取り込んだ画像は、Adobe CCのアカウントに紐付けされた個々のユーザーのライブラリに保存されるため、IllustratorやInDesignなどのデスクトップアプリ上でも同じように現れる。画像データはクラウド上にあるので、メモリ容量が圧迫される心配も少ない。

実作業では、画像を差し替えて複数のカンブを作り、クライアントの承認を得てから購入するのが

一般的な流れだ。プレビュー画像は透かしの文字が入っているが、購入の手続きを済ませると、プレビュー画像が本データに自動的に差し替わり、透かしの文字も消える。

1点あたりの価格もさほど高額ではないこともうれしい利点だ。画像の品質も優れており、日本を題材にした画像も豊富に用意されている。検索を試してみると、ヒット数に驚かされる。また、複数のキーワードを入力して検索対象を絞り込むことで、素早く目的の画像をみつめることができる。気軽にプロフェッショナル向けのストックフォトを使える環境がAdobe CC上で整ったことは、デザイナー、クリエイターにとって大きな助けになるだろう。

■ テキスト処理

テキストオブジェクトは、「見出し」「複数行テキスト」「段落」の3種類の作り方がある。テキストを

配置する場合は、フリーハンドで四角形や線を書き、さらに右下部分でタップする操作が加わる。テキストが配置されると、ダミーのテキストが表示される。タイトルや見出しの大きな文字は、ダミーテキストを選択してテキストを入力し直すこともできる。

書体は、Typekitのフォントを同期させて利用できる。日本語書体が20書体追加されたばかりなので(P056参照)、書体の選択肢が大きく広がった。イメージした雰囲気に近い書体を選べるだろう。行揃えの設定や、文字サイズ・行間の微調整もできるので、精度の高いカンブに仕上げるのが可能だ。なお、本書の表紙で使った文字は、すべてTypekitの日本語フォントを利用している。

カンブが完成したら、InDesign、Photoshop、Illustratorに送信する。作成したカンブは、閉じる操作で自動的に保存される。

■ デスクトップアプリケーションの操作

Adobe Comp CCでキャンプを作成後、目的のデスクトップアプリケーションに送信できる。モバイル端末側から送信すると、クラウドを経由してデスクトップアプリケーションに送られ、自動的にファイルが開く。開いた直後はファイル名が「名称未設定」になっているので、ファイル名を付け替えて保存しよう。以下ではInDesignで開いた場合の制作プロセスと作業上のポイントを解説する。

印刷物を制作する場合は、ドキュメントの設定がピクセルベースになっているので、[環境設定]から[単位と増減値]を表示させて、ミリメートルや級、齒の単位に変更する必要があるだろう。仕上がりサイズは、ファイルメニューから[ドキュメントサイズ]

を選び、目的のサイズになっているか確認し、誤差が生じている場合は修正しておく。

■ Adobe Stockを利用する

Adobe Comp CCで読み込んだ画像はライブラリに保存されているので、デスクトップアプリケーション側でもリンクが保たれている。再度、画像のリンクを変更するなどの編集作業が可能だ。

Adobe Stockを利用して別の画像に差し替えることも可能だ。InDesign CC 2015では、CC LibrariesパネルでAdobe Stockの検索が行える。パネル上部の[Adobe Stockを検索]の入力ボックスにキーワードを入力すると、検索結果がパネル内に表示される。使用したい画像の上で保存ボタンをクリックすると、ダウンロードが始まりライブ

ラリに保存される。ライセンスを取得する手続きもCC Librariesパネルから行える。

■ 本誌表紙の初期段階のキャンプ

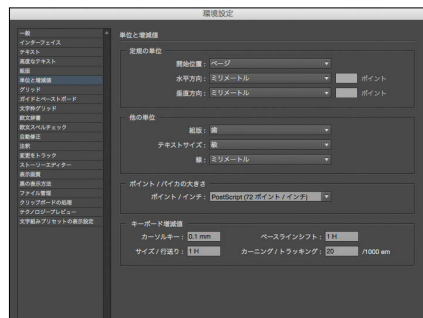
本誌の表紙制作においても、Adobe Stockを試した。本書では、InDesignを使って表紙デザインを行っているが、初期段階において、3種類のキャンプを作成した。また、プレビュー画像を使い、表紙の表面加工「ハイブリコート」用のデータも試作してデザインのプランを練った。3種類のキャンプを下に掲載したので参照してほしい。

InDesignで仕上げたキャンプは、PDF書き出しを行って編集部宛に送付し、さらに編集部において検討を加えるという流れで進めた。ハイブリコートの詳細については右ページを参照。

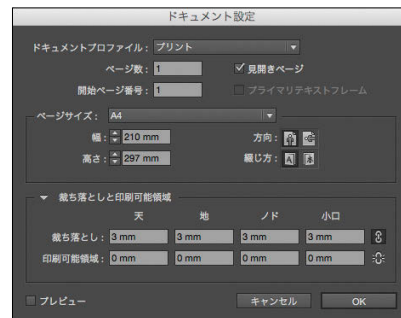
デスクトップアプリケーションの制作プロセス



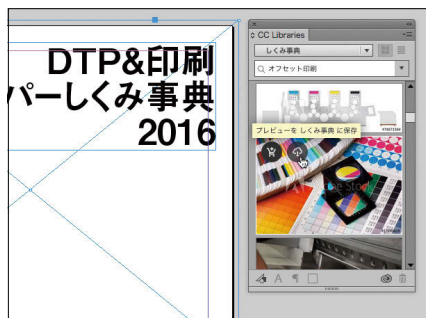
① Adobe Comp CCからInDesignに転送すると、InDesignで自動的にファイルが開く



② ドキュメントの単位がピクセルベースになっているので、印刷用に作業する場合は、単位を変更する



③ [ドキュメント設定] ダイアログでページサイズを確認する。誤差が生じている場合は修正する。[裁ち落とし]の設定も忘れずに



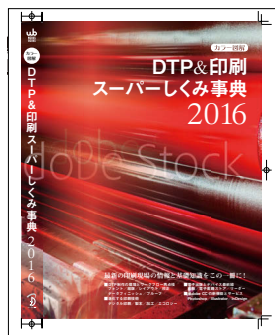
④ CC Librariesパネルでキーワードを入力して、Adobe Stockの検索が可能。保存ボタンをクリックするとライブラリに保存される



⑤ CC Librariesパネルから保存した画像をドラッグ&ドロップして、ドキュメントに画像を配置できる



⑥ ライセンスを取得する場合は、ライブラリで画像の上で右クリックし、[画像を購入]を選択する



本書の表紙デザインの初期段階のキャンプ。3種類作成し、表紙加工「ハイブリコート」の効果を検討した

Adobe Stockの写真のクレジットについて

出版物、エディトリアル(出版、報道)としての利用、例えば新聞や雑誌の記事等、またインターネット上のニュース記事、電子書籍、またテレビの報道番組やドキュメンタリー、情報番組等では、コピーライト情報は必須になる。

コピーライト情報の表記形式は次の通り:

© アーティスト名/ID 番号/Adobe Stock

■ 特殊加工用の刷版データの作成

表紙の印刷と加工は、大丸グラフィックスの特殊加工技術「ハイブリコート」を利用している。ハイブリコートは、イメージにあわせてグロスとマットを部分的に、そして任意に塗り分けることができる表面加工。従来の紙面保護の役割はもとより、表面加工がよりビジュアルのイメージを増幅させる表現力を持ち合わせている。また、特殊な質感により、印刷物に「触感」という新たな選択肢をもたらしてくれる。大丸グラフィックスでは、ハイブリコートの社内

生産が可能で、ノウハウの蓄積がある。通常のニス印刷と同等のスケジュール感、予算感で進めることができることも大きなメリットだ。

表紙のデザインにおいては、マットにする部分とグロスにする部分をどのように塗り分けるか、デザイナーと協議して決定した。デザイナーは、マット部分をK:100%、グロスイメージを白に指定したモノクロイメージを別途作成する必要がある。

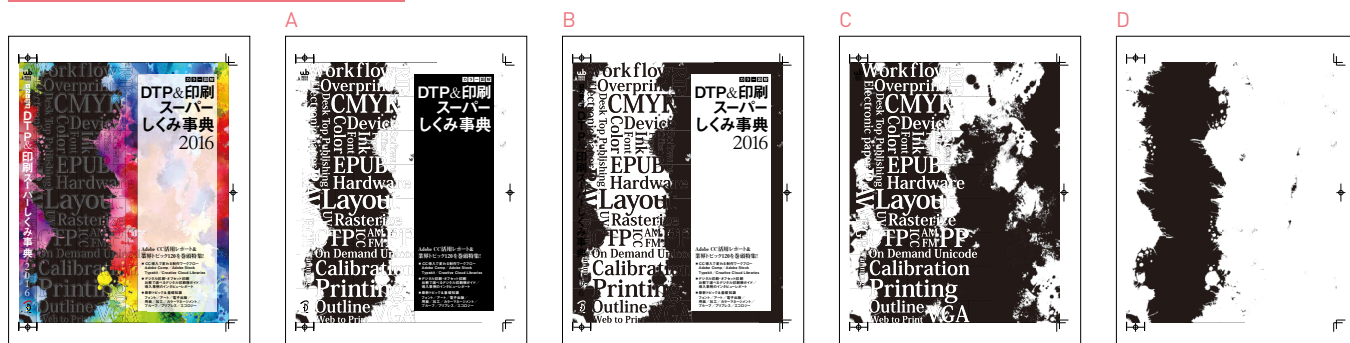
校正は本紙校正を行い、色味や表面加工の効果をチェックした。印刷工程では、通常の4色を刷ってから、コーターにより追加でマットニスとグロス

ニスを一度の工程で刷る。

ハイブリコートのメリットは、シルク印刷のような雰囲気や、同等とまではいかないが、オフセット印刷の技術の応用で可能としたことだ。加工とはいえ、インキの印刷と同じくみであるため、擦れや折り曲がりには強い。ロゴや文字などの細かい表現も問題ない。用紙はコート紙を使うのがベターで、逆に上質紙、ファンシーペーパーでは効果が出づらい。

実際の仕上がりは本書の表紙を参照していただきたい。

印刷入稿データの制作と本紙校正のプロセス



色校正は、CMYKデータとハイブリコート用のデータ4種類(A~D)を作成して効果を試した

文字部分をグロスイメージにしたもの

Aの反転バージョン。文字部分以外をグロスイメージにしたもの

タイトル部の白マドを無視して作成したもの(Y版を抜いている)

インクの画像のみをグロスにしたもの



上の4種類の表紙デザインを面付けして、本紙校正を依頼。結果を比較した



Aを拡大



Bを拡大



Cを拡大



Dを拡大

校正紙を拡大して掲載。グロス部分は、インキの色の濃度が上がり鮮やかに見え、マット部分は発色が抑えられシブクな印象になる。

Aは文字部分がグロス、背景の黒がマット。BはAの反転バージョン。ABの比較ではAの方がキーワードが際立つ。Cは白マドを無視、Dはカラーインク部分のみがグロス。塗り分ける絵柄の面積が広くなると、ハイブリコートの効果が伝わりにくい印象

SPECIAL INFO. 15%オフでAdobe CCを使えるキャンペーン! (2016年3月4日締切)

本書を購入いただいた、個人の方限定で、Adobe Creative Cloudの導入をサポートするお得なキャンペーンに参加できます。

通常は4,980円/月(税別)のコンプリートプランの月額費用が、初年度のみ15%オフの4,233円/月(税別)に。12ヶ月で10,000円近く、お得です。Photoshop CC、Illustrator CC、InDesign CC、Acrobat DCなど、すべての製品を使えるプランです。

また、Photoshop CCとLightroom CCを使えるフォトグラフィプランは、通常980円/月(税別)のところ、初年度のみ20%オフの784円/月(税別)でのご提供です。

どちらも特設サイトからのみの受付となり、クレジットカード決済

となります。それぞれのアドレスをブラウザに打ち込み、お申し込み下さい。

Adobe CC コンプリートプラン(すべての製品プラン)
<https://goo.gl/BCXF59> ※右上のQRコードでアクセス可

フォトグラフィプラン(Photoshop×Lightroomセット)
<https://goo.gl/PM64Y3> ※右下のQRコードでアクセス可

お問い合わせ先: アドビ システムズ 株式会社
TEL: 0120-61-3884



デジタル印刷・製版・オフセット印刷

OVER VIEW

- ▶ デジタル印刷のエントリー機は70～80枚機が主流に
- ▶ 小ロット印刷ならではの機動力を活かした実験的実例が登場
- ▶ テキスタイル印刷も大判インクジェットでこなす時代へ
- ▶ MISと印刷現場の情報が連携して最新状況をタブレットで確認
- ▶ 枚葉オフセット印刷はUV化が加速する

デジタル印刷は、いまや印刷方法の一つとして欠かせないものになった。印刷会社や製版会社に、なんらかの高速デジタル印刷機があることは珍しくない。さらに、一般企業内の複合機も高速化が進み、それが**印刷の内製化**を促している。印刷のプロである印刷・製版会社としては、発注企業の内製化に対して何らかの対策を講じることが待ったなしの状況と言えるだろう。そんな中、デジタル印刷機で目立つのが**クリアやシルバー、ゴールドといった特殊トナーや、高彩度化したトナーを使った付加価値印刷**である。そして、小ロット、短納期というメリットを活かし、さらに手仕事のような後加工を行うことで、**顧客満足度を高める印刷**を提案することが求められている。

一方、**製版**の分野ではPDF/X-4を使った入稿&下版、Adobe

PDF Print Engineを使ったRIP処理が普及し、ワークフローRIPを軸とした**ブルーフ**、**刷版出力**が当たり前。プロジェクトの進捗状況を社内ネットワークで共有し、さらに営業マンが出先で確認できるようなソリューションが本格的に稼働し始めている。簡易プルーフの代名詞だった**ケミカルプルーフ**は感材の販売終了時期が迫っており、**大判インクジェットプリンタによるプルーフ**が増えるだろう。

商業印刷の世界では、今年も**UV化**がトレンドになることは間違いのない。**速乾性が高く納期を短縮できるUV印刷**は、今や印刷会社を取り入れたい設備の上位に入ると言ってもよい。次のステップは、印刷時間が短くなって空いた時間に新しい仕事を入れる、あるいは、さらなる**コストダウンを狙った生産効率、人的負担への挑戦**になりそうだ。

topic

034

一般オフィス電源(100V)で稼働する高速プリンタ

富士ゼロックスは「DocuColor 7171 P」の発売を開始した。「DocuColor 7171 P」は100V電源対応ながらA4カラー71枚／分という高速印刷を実現したモデル。プリントサーバーには印刷現場でのニーズにも即した「PX710 Print Server」を組み合わせたことができる。

上位機種「Versant 80 Press」に搭載されるプリント自動調整専用ソフトウェア「Simple Image Quality Adjustment」を採用し、表裏見当や面内ムラの調整、トナーの転写調整も自動で実行。大量枚数の連続印刷でも高品質を維持するほか、厚紙は300g/m²まで通紙可能。耐水紙やラベル紙といった特殊用紙も問題なく印刷できるという。



毎分71枚という高速機ながら一般的なオフィスで使われる100V電源に対応する機種は珍しい。ライトバブリング市場のエントリー機として期待される

topic

035

無料のデータチェック機能で印刷通販を安全に利用できる

印刷通販の「プリントバック」は、データ入稿時に印刷データを自動でチェックする「クイックデータチェックサービス」を開始した。プリントバックではこれまで入稿データを受け取った後で専門スタッフが確認していたが、入稿者自身がデータチェックを行うことで、データチェックに掛かる時間を省略することができるようになった。

なお、データに問題があった場合は、その場で修正することも可能。修正できるのはページサイズや色変換、塗り足しの作成など。修正作業は特別なアプリケーションを必要とせず、Webブラウザ上で対応できる。

ぜひご利用ください！

Quick Data Check

クイックデータチェック

無料

1 早い！ その場でデータチェックの結果が分かる！

2 安心！ 入稿完了と同時に納期が確定！

3 便利！ 3Dビューで仕上がりイメージを360度チェック！

入稿と同時にデータチェック！

入稿時、印刷データを自動でチェックいただけるサービスです。その場でデータチェックを完了しお客様に直接ご確認いただくので、入稿後の納期ずれの心配もございません。もちろんシステム利用料は無料！ぜひご利用くださいませ。

なお、これまで同様にプリントバックにてデータチェックを行い、結果はメールにてご連絡させていただく方法もお選びいただけます。ご希望の場合はこちらの手順にてご注文くださいませ。

(今後、随時対応商品を拡充していく予定です。どうぞご期待くださいませ。なお、対応アプリケーションはこちらをご確認くださいませ。)

サービス詳細はこちら

ご利用手順はこちら

データ市場のワンポイント

データチェック方法は、①プリントバックに任せる、②クイックデータチェックサービスの2つから選べる。クイックデータチェックサービスの使用料は無料

ハイデルベルグとリコー、 日本国内における協業を強化

ハイデルベルグ・ジャパンとリコー・ジャパンは、日本国内における販売協業を強化し、ハイデルベルグ独自のデジタルフロントエンド「プリネクトDFE」とリコーの「RICOH Pro C7100、C9100シリーズ」を組み合わせたデジタル印刷システムの販売を開始した。

今回ハイデルベルグの自社商品として販売するのは、デジタル印刷機「ラインプリントCV」と「ラインプリントCP」。ラインタイプ・ヘル時代から定評のあるCMSと優れた操作性が、オフセットワークフローとシームレスに統合されたプリネクトDFEを確立し、本格的なオフセット・ハイブリッド・ワークフローを実現している。



ラインプリントCV

Kodak NexPress専用の デモセンター開設

コダック合同会社は、品川区東品川近郊に同社のデジタル印刷システム「Kodak NexPress」専用のデモセンターを開設した。

開設されたデモセンターでは、Kodak NexPressの見学やデモンストレーション、印刷テスト、導入企業に向けたトレーニングなど各種サービスが提供される。また、Kodak NexPressの特徴であるゴールド印刷や1mまで対応する長尺印刷、グロス加工、ディメンジョナル（盛り上げ）印刷など、印刷の付加価値向上に取り組む印刷企業が制作した実サンプルも豊富に取りそろえているようだ。

デモセンターには会議室も設置。この会議室は希望者に貸し出され、勉強会やセミナーに利用できる。



Kodak NexPressデモセンター
コダック合同会社営業本部 TEL:03-6837-7285

新インク「UltraChrome HDXインク」を搭載したSureColor登場

エプソン販売は、大判インクジェットプリンタ「SureColor」シリーズの新しいラインアップとして、新しい「UltraChrome HDXインク」を搭載した10色顔料インクモデル「SC-P9050シリーズ」（B0サイズ／698,000円）および「SC-P7050シリーズ」（A1サイズ／398,000円）の発売を2015年10月中旬より開始した。

「UltraChrome HDXインク」は、フォトブラックインクの顔料粒子量が従来より1.5倍増量し、黒濃度を向上させたもの。顔料粒子量が増えたことで用紙表面への定着性が向上し、より深い黒みを再現することに注力した。カラー印刷時にはより立体的に絵柄を表現することが可能となり、モノクロ印刷時にはシャドウ部の微妙な階調の変化を忠実に再現できるという。

そして、10色顔料モデルのインクシステムにはバイオレットインクまたはライトグレーインクが選択できる2タイプを用意。バイオレットインクモデルの場合、青から紫の色域が拡大。オレンジ、グリーンインクも搭載されることで、写真品質にこだわるポスターや、特色再現が求められるパッケージ印刷のブルー用途としての利用が期待されている。

本体の紙送り機構も改良されており、インク着弾精度、紙送り精度などが向上。高速モードでも安定して印刷できるため、生産性向上にもつながった。



写真はB0サイズの「SC-P9050シリーズ」

ライトグレー搭載モデル



バイオレット搭載モデル



ライトグレーインク搭載モデルとバイオレットインク搭載モデルの違い。商品を購入した後でライトグレーインクとバイオレットインクを入れ替えることはできないので、用途に合わせて導入したい

■先進的な印刷事例をビジネスに活かす

「PIXIアワード」は、富士ゼロックスがアジア・パシフィック地域（16カ国）で毎年開催するプリント作品のコンテストである。2015年度は26部門で審査が行われ、9の国と地域の作品が優秀および最優秀賞に選ばれた。応募作品の条件は、「富士ゼロックスのデジタル印刷機で印刷されたもの」であること。デジタル印刷の新しい使い方、見せ方を訴求した作品が集まるため、受賞作品にはオンボックスな印刷物で高品質なもの、一般的な印刷物にない「特殊印刷」や加工を施したユニークなものなど、多様な作品が並ぶ。

ここ数年の受賞作品の傾向について、日本でPIXIアワードの広報を手掛ける富士ゼロックスの中村真砂恵氏（プロダクションサービス営業本部）は、「（受賞作品は）作り手の遊び心が存分に活かされたものが多いです。極小ロットならではのこだわりも多く見られます」と語る。スタート当時は書籍やマニュアル、パンフレット、リーフレットなどオンボックスな印刷物しかなかった募集カテゴリーも、回を重ねるごとに増えてきて、2015年には26部門になった。これは、多様な応募作品の種類に合わせた結果だそうだ。

「応募作品のクオリティは、年々アップしています。特にタイやマレーシア、シンガポールなどの作品は面白いですね。デジタル印刷という既知の概念を越えて、スペシャリティの高い、アイデアに富んだ作品が印象に残ります。日本の応募作品は、広い消費者を意識した印刷物で、すぐにでも使える、商品力の高いものが多いようです」

日本国外の受賞作品を眺めると、小ロット、1回限り、という発注に対して、一般的なデジタル印刷機の使い方の範疇を超えて手作業的なノウハウと後加工のアイデアを盛り込んだ印刷物が多い印象を受ける。一方、日本からの応募作品は、小ロットとはいえ継続的な仕事を見込んだものが多く、品質保証と生産性が両立する作品に仕上がっている。そのためなのか、採算を度外視したような作品は、海外勢に軍配が上がる。

■海外と日本の違いを知るよい機会に

たとえば2013年のデジタルパッケージ部門を受賞したのは、LBラベル&パッケージング社（タイ）。大量生産されるのが当たり前だったパッケージの印刷で、「一点物」のようなオーダーメイドなパッケージを提案し、生産力の向上とユニークなパッケージデザインを両立させたことが受賞の理由になった。

また、シュ・ハイ・ジャー・ツォー社（中国）が制作した中国の伝統絵画コレクションのブックレットは、印刷用紙に書画用紙「宣紙」を使い、Color 800/1000 Pressで印刷。このアイデアと印刷品質の高さが受賞の決め手となり、2012年の書籍・マニュアル部門および全部門で最優秀賞となった。

「デジタル印刷に25gsmという薄紙の書画用紙を使うなんて、普通は考えられません。でもこの会社は、書道や水墨画といったコンテンツの個性を活かすためにどうしても宣紙を使いたいと、コート紙に貼り合わせて印刷するというアイデアを見つけたようです。こうした「メーカー保証外」とも言える印刷のアイデアは、私たちメーカーにとっても学びが大きいですね」

一方で日本の受賞作品は、折りや切り抜きなどの加工も駆使したPOPやスタンドなど、印刷物を自社商品として売り出す商業的なものが多い。日本ではオンデマンド印刷が商業印刷の方法として普及しているため、印刷品質や後加工を含めたトータル技術で技を競うことが多いからだろう。

PIXIアワードの受賞企業が、海外は広告やデザインから印刷まで手掛ける企業であることに対して、日本では印刷が主体である企業に集中していることは、作品の特徴にも映し出されているのではないだろうか。クリエイションと印刷の現場は、物理的にも心情的にも近いほうが創造性に富んだユニークな印刷物を生みやすいのだろう。PIXIアワードは、アジア・パシフィック市場の中で、自社の印刷技術やクリエイションがどんなポジションにあるのかを知るよい機会にもなる。「これは！」と思うデジタル印刷の成果が出たら、応募してみることもまた自社のセールスポイントのひとつとなるのではないだろうか。



LBラベル&パッケージング社（タイ）の作品。オーダーメイドのようなパッケージへの需要が高まってきたことを受け、Color 1000 Pressで必要に応じて多様な特別仕様の箱を印刷し、顧客の要望に答えている（2013年オンデマンドパッケージデジタルパッケージ部門最優秀賞）



BFブックス社（韓国）は、点字印刷の下地にColor 1000 Pressのクリアトナーを使い、重ねて印刷することで樹脂の定着性を向上、耐久性もアップさせるというアイデアを生み出した（2013年書籍・マニュアル部門最優秀賞）



シュ・ハイ・ジャー・ツォー社（中国）は、中国の伝統絵画コレクションを宣紙に印刷。繊細な絵画の風合いや完成を維持する再現性と、Color 1000/800 Pressを使った印刷技術の高さが評価された（2012年書籍・マニュアル部門および全部門最優秀賞）



群馬県伊香保にある温泉旅館「香雲館」の作品。DocuColor 1450GAを使い、宿泊客の名前を入れた箸袋や小物の他に、大根灯籠や料理皿にもメッセージを入れている。日本らしいおもてなしが高く評価された（2015年マルチピース部門優秀賞）

●国別に見るPIXIアワード2015受賞企業

国	最優秀賞	優秀賞
オーストラリア	6	5
タイ	5	3
香港	3	2
シンガポール	3	0
マレーシア	2	0
台湾	2	0
中国	1	4
韓国	1	0
日本	0	2



北陸サンライズ（日本）は、DocuColor 5656Pによる印刷、切り抜き加工を組み合わせ、ユニークな形状の販促POPを制作（2015年販促品部門優秀賞）